

---

# 北極星

能勢恭介

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

北極星

### 【Nコード】

N0041H

### 【作者名】

能勢恭介

### 【あらすじ】

手をつないで歩いていたはずだった。いつでも隣にいるはずだった。鏡を見るように、二人はよく似ていた。考えていることも、感じていることも、みんなわかっていたつもりだった。けれど、あの秋の日、彼女はいなくなってしまった。私の知っている彼女が、どこかへ行ってしまった。私一人を置き去りにして。だから、私は彼女を探すことにした。たった一人で。

## Prologue

### プロローグ

雨上がりの舗道。バスターミナルを出ると、雨はすでに上がり、雲間から暮れようと傾いた西日が射していた。

走る車が巻き上げた水煙が輝いていた。スプリングラーのように見えた。真夏の芝生、その上で舞う飛沫のように。

寂しい。

夏が終わったからだ、夕陽を浴びる水煙をぼんやり見ながら思う。夏はとうに過ぎ、むしろ冬までの時間を数えた方が早いというのに。

バスターミナルを出て、高架下のCDショップの前で立ち止まる。地下鉄の出入口が目の前で、階段から地下の熱気がほのかに暖かかった。吐く息がかすかに白く、見上げた空は雲が切れ、紺色に近い青空がのぞいていた。まるで溶いたばかりの絵の具で塗ったような舗道に濡れた落ち葉が張りついて、それは幾人もの靴で踏まれてちぎれていた。左手に持った傘が何となく重い。

右手首の時計をみると、四時をとくにまわっていた。時間を決めて待ち合わせているわけではないが、けれどいつも待たされるのは宏佳の方だった。襟足が寒い。髪を切りすぎたからだ。

夕刻を迎えた街並みで、もう気の早い街灯がぼつぼつと灯っていた。やたらとアクセルをふかした路線バスが、「回送」の文字をちらちらさせて交差点を曲がっていった。宏佳はもう一度時計を見た。「遅刻じゃないよね」

不意に耳のそばでささやかれた声に顔を上げた。待ち合わせの相手。今日も遅刻。

「いつから待ってた？」

「五分くらい」

「じゃあたいしたことない。よかった」

「まあね」

未佳。笑顔。未佳がこんな顔をして笑うってこと、きつと私以外、知ってる人は少ない。きつとそうだ。宏佳は思う。

「寒いね」

「うん」

「薄着じゃない？」

「かも」

「コート貸そうか」

「いいよ。風邪引く」

「お姉ちゃんが風邪引く」

「未佳の脚の方が見てて寒い」

「やっぱり短すぎ？」

「私から見たら」

「確かにちよつと寒い」

未佳の吐息も白い。十一月。近郊の山からはすでに雪の便りが届いていた。

「雨、上がったね」

歩き始めて、未佳が言う。

「何時頃だった？」

未佳に続いて、宏佳も歩き出す。

「六時間目の終わりくらいかな。バスに乗ってるときは、まだちよつと降ったり止んだり」

「三十分もたつてないね」

「憶えてない？」

「あんまり。窓の外見てなかった」

未佳は水たまりを弾むように越える。宏佳も真似して、飛び越える。

「傘は？」

手ぶらの未佳に、宏佳が問う。

「忘れた」

「どこに」

「学校」

「また忘れたの」

「地下鉄乗ってから気付いた。取りに戻ったら、間に合わないって思ってた」

「雨上がらなかつたらどうするつもりだった？」

「そんなときは、お姉ちゃんと相合い傘」

「相合い傘って、古いなあ」

区役所の横を過ぎて、南郷通の交差点は赤信号だ。

「ずいぶん降ったよね」

点字ブロックをローファアーのつま先でつつきながら、未佳。

「空がきれい」

「虹が出てたら、いいのにな」

未佳は片足立ちのまま、顔を上げ、晴れ間を見上げる。

「見えるかも」

「虹？」

信号が変わる。消防署前に停まっている消防車の赤が目には鮮やかだ。秋の午後、大粒の雨が降った夕方、空気は恐ろしく澄んでいた。

「まだ降っているところがあればさ、見えるかも」

青葉町に入り、通りを歩く。未佳が先頭、一、二歩遅れて宏佳。

未佳の歩幅は広い。けれど、宏佳も負けない。やや早足気味で、二人は歩く。葉を散らしてしまった並木と、住宅街に点在する木立。風が吹くと、電線や枝先が鳴いた。通りの街灯は、まだ点いていなかった。

「間に合うかな。公園でしょ」

未佳がつぶやく。つぶやきだが、よく通る声。それは宏佳も同じ。

二人の声はよく似ている。

「日が暮れそう」

言いながらも、未佳は歩く速度を緩めない。信号待ちでは小刻みに足踏みをした。

「今日の日没は、16時45分だよ。まだ間に合う」

「なんで知ってるの」

「新聞」

宏佳。ブレザーのポケットにそっと左手を入れる。暖かい。季節が巡っている。もうすぐ、冬だ。

「寒くなる」

未佳がぼやく。一瞬二人を風が追い抜き、未佳のセーラー服の襟が浮く。

二人は歩く。湿った舗道に、湿った足音。しかし車の音が上回る。巻き上げられた水しぶきが、舞って二人に飛んでくる。

辺り一帯は、冬季オリンピック以降に宅地化され、その後も奥へと繁殖を続けるようにして、畑や草原や雑木林はマンション、コンビニエンスストア、住宅に姿を変えた。平坦な地形ではなく丘陵で、場所によっては見晴らしがいい。この先の住宅街に小高い丘があり、そこはちょっとした公園になっていた。二人はバスターミナルから自宅への帰路、ときどきこうして寄り道をした。

通りに面して入り口があり、公園の周回路も落ち葉でびっしりだった。上を歩くと足音がしない。

「やっぱり寒い」

コートを着ている未佳が肩を震わせた。

周回路はやや登り。未佳を先頭にして、行く。造成がまだ続く公園は、春は梅と桜が同時に咲き、休日は賑わう。が、晩秋、雨上がりの夕暮れ時の今、ジョギングに精を出す無表情な若い男、犬に連れられた中年の女性。制服姿の二人は、ほんの少し異彩だ。

「見える？」

先に行く未佳に、宏佳が訊く。

周回路がゆつくりと右カーブを切ると、景色が開け、丘の上に出る。

「見えない。残念」

二人、並んで、ベンチの前、丘の頂上に立つ。札幌の街並みが見渡せる。

「でも、きれい」

宏佳。

もう、気の早い時間ではない。街灯も家の灯りも、堂々と点っている。JRタワーも見えるし、目をこらせばテレビ塔も見えた。日はまだあったが、いつの間にか雲に潜り込んでいた。あと少しすれば、手稲山の向こうへ沈んでしまう。そうすれば、二人の背後からゆっくりと夜が包み込む。

未佳が宏佳を向いていた。未佳の黒い髪が風に揺れた。切りすぎってしまった宏佳の髪より、未佳はずっと長く、肩から背中へ届きそうになっていた。二重のまぶたの向こうで、未佳の目がやや潤んでいるように見えた。そばの水銀灯が音を立てるように点った。未佳の左手が、そつと宏佳の右手を握った。

「お姉ちゃんの手、冷たい」

美香に握られた右手が暖かかった。宏佳もそつと握りかえした。空気は冷たかったけれど、体温が信じられないほどに暖かい。未佳が笑う。そつと歯を見せる。宏佳も笑ってみた。鏡を見ているような、けれど、鏡とは違うような。髪型が違うだけで、二重のまぶたも、細い顎の線も、低い鼻もなにもかも、二人は同じ。宏佳と未佳は双子だ。背の高さも同じ、持っている遺伝子が、まったく同じ。

「このまま……」

宏佳がそつと声を出す。

「なに？」

宏佳を向いたまま、未佳が訊く。同じ声。

「時間が止まってしまえばいいのに」

今、私はどんな顔をしているんだろう。宏佳は思う。

「どうして」

宏佳は未佳に応えず、街並みをぐるりと見渡した。日は雲に潜っ

たまま沈み、世界は青く、浅い水の底に沈んだような色をしていた。雲がゆつくりと、ごくゆつくりと流れていた。今日は、月が見えるだろうか。太陽と同じように、雲の向こうに隠れたまま、ぐるりと夜空を巡るのだろうか。

「なんとなく」

時間をおいて、宏佳は応える。

未佳は、もう笑っていないかった。潤んだような目。

「星、見えるかな」

宏佳は明るく言ったつもりだった。

未佳が振り返る。

「まだ、見えないよ。てか雲出てるし」

「北極星」

「どれ」

「うそ。見えないよ」

晩秋

雨上がりの夕暮れ。

世界がそこで止まってしまえばいいのに。

未佳の左手は、まだ宏佳の右手を握ったままだった。



## 扉

### 一、扉

扉を開けた。

止まっていた空気が流れた。懐かしい匂いがした。

一步、踏み入れた。

ずっと閉めきっていたクローゼットを開けたような気がした。季節変わりの衣替えに、久しぶりに開いたクローゼット。けれど、開いた扉はクローゼットではなかった。

絵の具の匂いがした。油彩の匂いだ。一步足を踏み入れ、二歩目が出せない。

カーテンを閉めた部屋は暗い。でも灯りをつける気になれない。今は、夜じゃない。

強引に二歩目を踏み出すと、あとは三步、四歩。五歩目で窓まで到達した。両手でカーテンを開く。弱々しい陽射しが部屋に広がった。

それにしても、寒い。

窓からは庭の樹が見えるだけで、まだ葉もなく、芝もくすんだ色のままだ。空は曇っていた。

窓際にデスク。きっちり並んだ参考書と、辞書、それから四六判の小説。反対側に書棚、その横にベッド。見慣れた部屋だが、欠けているものがある。

部屋の住人が、いない。

首といわず肩といわず、上半身の心地が悪かった。着慣れないスーツのせいだ。クローゼットの横にスタンドミラーが置いてあり、光を入れた部屋の中、突っ立っている自分が映った。

嘆息した。

油彩の匂いが、鼻の周りであつた。壁に何点かキャンバスが並んでいる。どの絵もよく知っている。描いている最中から知っている。いや、キャンバスが真っ白なころから知っている。でも、作者がいない。

あいさつをしに来たつもりだった。もちろん、誰もいないのを知って。

来て後悔した。来るんじゃない。

デスクに小さな目覚まし時計。八時をやや回ったあたり。

もう、行かない。

もう一度窓に向かう。

部屋は一階。目の前には庭。夏は、窓が一枚の絵のようになる。

でも、日当たりがよくない。それが私は気に入らない。

嘆息。

カーテンを閉めた。

暗くなる。目が暗さに慣れない。だから実際より部屋が暗く感じる。

声が出ない。声に出さない。

行ってきます。

未佳は暗くなった部屋の扉を、閉めた。

春と呼ぶには寒すぎた。でも雪が溶ければそれは春で、だからいまはもう冬ではない。砂混じりの風を受け、その中に雪が溶けていく匂いを嗅いだ。

四月。

桜が咲くにはまだ遠く、タンポポが咲くにもまだ早い。舗道に薄く積もった砂を踏みながら、駅までの道のりをゆつくりと歩いた。薄曇りの空は、どこに太陽があるのかわからない。引き返したい衝動に駆られながら、未佳は改札を抜け、プラットホームで快速電車を待った。

車窓から見える街並みはくすんでいた。街を飾っていた白い雪が

消えた春、未佳は今時季の街が好きではなかった。色彩に乏しく、光も少なく、モノクロームのフィルムで撮るには、コントラストも弱すぎる。一言で言うなら、薄汚い。やがて訪れる本当の春を、未佳はそつと目を閉じ、想う。切りすぎた髪で、襟足が寒い。

プラットホームに滑り込んできた快速電車はやたら甲高いブレーキの音で未佳の耳を刺す。列の後尾から電車に乗り込むと、新千歳空港からの乗客たちが、荷物と熱気で車内を占領していた。未佳は仕方なくデッキに立って曇った窓から街を見た。どこもかしこもくすんでいた。こんな天気のせいだ、きつと。

札幌駅で乗り換える。プラットホームは函館や釧路に向かう特急列車のディーゼルエンジンがやかましく、排気煙で遠くが霞んで見えた。陽射しのない分余計に寒い。まだ身体が眠っているのかもしない。エスカレーターではなく階段を早足で降り、そして一段飛ばしで駆けた。辿り着いた乗り換えホームで待っていた普通列車にも未佳が座る座席は残っておらず、息を整えながらデッキに立った。来るんじゃないかった。

壁にもたれて、また目を閉じた。

足の下でディーゼルエンジンがわめき始めて、列車が動き出す。街のはずれに向かう普通列車は律儀にひとつひとつの駅に停まり、ドアが開くたび、襟足と耳が寒い。

ようやく行き着いた北区のはずれの駅。列車もここで折り返す。列車を降りると、いよいよ風が強かった。乗客達は改札に流れていくが、未佳は少しの時間をプラットホームでつぶした。すぐに駅を出る気になれなかった。アイドリングを続ける列車のエンジンの音が、耳の入り口でドロドロと転がっている。足が重い。

また、空を見た。雲が薄くなっている。自分の影がプラットホームに落ちていた。対向ホームの向こう側は枯れ色の草地で、灌木がぼつぼつと立っていた。やや首を巡らすと、赤と白の煙突が見えた。鉄塔が並び、ずっと遠くに中心街。ほとんど来たことのない街。駅員が未佳を一瞥した。ようやく、足が動いた。

プラットホームの下で、フキノトウが顔を出していた。  
春と呼ぶにはまだ寒い。  
でも、やっぱり今は、春なんだ。

両手に余るほどの勧誘チラシを握らされた。

大学の講堂へ続く通路はまるで花道のようで、両側を在学生たちが手製の看板やチラシを手にして新入生を迎えていた。受け取ったところでどうせゴミになる。受け取りたくなかったが、結局講堂に着くまで、未佳の左手にはサークルのチラシが束で握られた。

晴れ間が見えた。駅に着いたとき未佳を迎えた風は、ここでも未佳を離さない。乱れた前髪が目に入った。ガラスに映った自分が見えた。スーツ姿がまるで滑稽で、未佳は苦笑した。周りにどう見えただのかはわからない。嬉しくて笑ったように見えなければいい。未佳は思った。

入学式のこととはよく憶えていない。眠かった。ほとんど意識がなかった。履修要項を渡され、入れ違いにチラシの束をゴミ箱に捨てた。少し、軽くなった。そして、少し、眠くなった。

昨夜はほとんど寝ていない。眠れなかった。布団の中で、様々なことを想った。数週間前の卒業式のこと。目に涙を溜めた後輩たちが渡してくれた寄せ書きのこと。けれど寄せ書きの内容をまるで憶えていないこと。やはり目を泣きはらしていたクラスメイトのこと。ずっと友達でいようね。

うなずけなかった自分のこと。醒めた意識の中で、そういう言葉を蔑んでいたこと。

布団の中で目を閉じたまま、時間がゆっくりと逆回転していき、受け取った合格通知や、気負いがなさ過ぎてそれが功を奏したらしい試験のこと、吹雪の中、学校の帰り、風に背を向けるようにして地下鉄の駅まで歩いたこと、ラジオを聞きながら居眠りをしたクリスマス夜の夜のこと。そのあたりから記憶が混濁し始め、白い壁や薬の臭いや白衣の看護師や、割れたガラスやイーゼルから落ちたキャ

ンバスや、そうした映像がまぶたの裏に流れた。

ようやくとうとうとしたのは、カーテンの向こうが白々とし始めたころだった。結局眠れず、その結果、スチームの効いた教室が未佳の眠気を誘った。

実際、わずかな時間、未佳は眠っていたのかもしれない。意識が現実につながったとき、未佳はここが見慣れた高校の教室ではなく、見慣れない大学の教室であることに強い違和感を抱いた。自分を始め、誰も制服を着ておらず、知った顔が一人もいなかった。

教室のあちこちで、自己紹介が始まっていた。いろんな顔があった。未佳はまだ眠かった。蛍光灯の明りがぼんやりとまぶしかった。窓の外はまた薄曇りで、黒っぽい針葉樹と、葉を落した広葉樹、枝を透かして国道が見えた。未佳は窓から教室へ視線を移し、学生たちの顔をひとつずつ、短く眺めた。みんな笑顔だった。また強い違和感を憶えた。笑えない自分に。

なぜ、ここにいる？ どうして、私はここにいる？  
胸中のつぶやきではなく、実際声に出た。けれど自分のつぶやきより、隣席の男子学生の声がボリウムで上回っていた。だから自分の声が自分の耳にも届かなかった。喧燥の中にあつて、それぞれの声が反響し、そのひとつが自分を呼んでいることにも、しばらく気付くことはなかった。

肩をつつかれた。反射的に振り向いた。

「ねえ」

メガネをかけたショートヘアの女の子がいた。メガネの向こうの目は大きく、ネコを思わせた。

「具合でも悪いの？」

振り向いたまま、未佳は口を開かなかった。

「眠いだけ？」

女の子はきれいな目をしていて。黒ぶちの、大きなレンズのメガネの向こうで、ゆっくりと瞬きをした。

「私、広島」

無造作な口調の割に、きれいな声をしていた。

「広島、から来たの？」

自分がどんな顔をしているのか、わからない。自分の声にはまるで表情がなかった。無愛想だ。そう思われるに違いない。別にそれでもかまわない。言ったあと、メガネの女の子は大きな目をまたちよつと開いて、未佳の言葉を分析している顔をした。

「みんな間違うなあ。やっぱりそう思うのかな」

未佳から視線をはずして、苦笑した。

「名前。広島って言うの」

「……」

「東京から来たの」

「東京」

「東京。寒いね。こっち」

広島と名乗ったメガネの女の子は、大きな目を細めてみせた。くつきりした眉毛だった。目尻が少し上がっていて、やはりネコみたいな顔だ。

「こっちの人？」

丸めた背もネコのようだ。

「うん」

「なにしに来たの？」

「なにが？」

「ここへ」

棘のある口調ではなかったと思う。きれいな声。それは変わらな  
い。あまりに無駄のない言葉だったから、未佳は意味を理解できな  
かった。何しに？　ここへ？

「どういうこと？」

「いや、まあいいや。こっちの人が。多いよね、こっちの人。当た  
り前か」

右手に持ったペンをくるくる回しながら、歯を見せた。

「よろしく。私、広島。広島緑里。それにしても寒いよね。これで

四月なんだよね。風邪引きそうだよ。あ、でも部屋の中は暖かいよね、逆にさ」

振り向いた姿勢がつかなくなった。未佳は身体ごと向き直った。

「あっち出てくるときね、『クマが出る』とか『カニ送れ』とか『雪が降る』とか言われた言われた。バカじゃねえのって思ったけど、雪が降るってのは当たっちゃったね」

きれいな声のまま、早口でしゃべる。どこでうなずいていいのかわからないような速度で。

「四月に雪が降るってさ、信じられないよ。ホント。だって、あつち桜咲いてるんだよ。ほら、入学式つて桜つてイメージじゃない。こっち来てね、びっくり。桜吹雪じゃなくて本当の吹雪なんだもの。吹雪よ吹雪。四月に」

数日前、冬が戻ったように一日だけ、札幌は雪になった。積もらなかったが、確かに吹雪いた。その日の記憶。鼻の奥に消毒液の臭いが戻る。

「失敗したかと思って思っちゃった。こっち来たの。寒いのが苦手なんだよね。こっちの冬って、やっぱり寒いんだろうなあ」

どうあいづちを打っていいのかわからない。あいづちを打つべきなのかもわからない。なぜ私に話しかけてくるのかもわからない。それがきつと表情に出ていた。メガネの奥で二度瞬きをして、女の子は口をつぐんだ。

「しゃべりすぎ？ ごめん。気にしないで。暇だから。眠っちゃいそう。私のこと、スピーカーかなんかだと思って。スピーカーだったら、文句はないでしょ」

だから、未佳は言ってしまった。

「スイッチ、あるの？」

「スイッチ？」

「切ってもらっても、いいかな」

言っと、向かい合ったまま、緑里は本当にスイッチを切ったように黙ってしまった。

また、喧燥が耳に戻ってきた。聞こえなかったのではない。未佳の耳が、緑里の声を優先処理していたから、聞こえないように感じていただけだ。ずっと喧燥の中にいた。場面は変わっていない。緑里は黙ったまま、未佳の目を見ていた。

「ごめんなさい」

未佳は喧燥の中に、自分の言葉を差し込んだ。

「なんで？」

緑里は表情を変えず、訊いた。

「言い過ぎた」

「なんで？」

「切ってもいいかな、なんて」

「私が言っただから気にしないで。ボリューム下げればよかった？ ごめんね」

緑里は言つと、未佳から目をそらして、手許の履修要項を開き、それつきりしゃべらなくなった。

居心地がよくない。未佳も向き直り、また雨の日の水たまりみたいな喧燥の中に戻った。

ただ背中に、緑里の存在を、今度は感じた。さっきまで感じなかったのに。

意識つて、こういうことだ。やはり、居心地がよくない。

もう眠くなかった。

履修要項を入れた薄っぺらいカバンがなんとなく重い。思って気付いた。重いのではなくて、邪魔なのだ、と。

喧燥の教室は、担当の教官が一方的に話しはじめて静かになり、自己紹介があるわけでもなくただ淡々と時間が過ぎ、結局眠気が戻った。いよいよまぶたが重くなったころ、すべてが終わった。

教室から出て行く学生たちは、すでにいくつかのグループになっていた。高校の学校祭が終わったあと、気付けば幾組もカップルができてあがっていたように。さすがにカップルはいなかったけれど、



未佳はそのどれにも属さず、全員が教室を出て行くまで、履修要項をめぐって時間を稼いだ。緑里も一人、未佳を振り返ることもなく教室を出て行った。居心地の悪さは続いていたが、結局未佳は緑里に声をかけず、緑里もあれつきり未佳に話しかけてこなかった。

一人残った教室は静かで、未佳はしばらく立ち上がらず、座ったままで黒板を見ていた。

担当教官がなにかを書き、消した。ノートをとることもしなかったから、眠気に任せて、黒板になにか書いてあったかも憶えていない。いよいよなにをしに来たのかがわからない。

来るんじゃないかった。

嘆息して、立ち上がった。

入学式を終えた新入生が出て行き、まだ講義が始まっていないキヤンパスは学生の姿もまばらだった。談話スペースのある吹き抜けで自販機を見つけ、未佳は暖かいお茶を買い、その場で飲んだ。教室は暖房が効いていたが空気が乾いていて、お茶が喉に沁みだ。おいしかった。そして、全身がぐったりするほど緊張していたことに気付く。

「なにやってるんだろうね」

思わず、まったく意識することなく、言葉が口から出た。

煙草の臭いがする。灰皿から薄く煙が上っていた。

外はまた少し晴れ間が見えていた。もう午後だ。右手首の腕時計を見ると、短針は三時に届いていなかった。少し空腹を感じた。朝からなにも食べていない。空腹を感じたが、なにかを食べたいとは思わなかった。

外に出ると寒かった。確かに緑里でなくても、寒いと思う。雪は溶けたけれど、「春」と呼べるなにかは何もない。花が咲いているわけでも、新芽が蠢いているわけでもなく、誰かの家の小さな庭で、福寿草の芽が覗いているだけ。それだけでも春と呼んでいいのかもしれない。でも、未佳は寒かった。

駅へ向かう道を歩く。列車の時間が分からない。分からないなら

急ぐ必要もない。どうせ帰ってなにをするわけでもなかった。幾人かの足音と、自分の足音が混ざり合う。風は強く、寒い。

緑里の目を思い出した。大きくてきれいな目をしていて。仲良くなれたかもしれないとも思った。自分の名前を教えていないことにも気付いた。

「未佳ちゃん？」

名前を呼ばれた。聞き覚えのある声だった。振り返る。

「やっぱりだ。髪切ったんだ。わかんなかった」

「浅田？」

「そうだよ。ここに来てたんだよね」

浅田。浅田友香。高校のクラスメイト。

「久しぶり」

「そう？」

「卒業式から会ってない」

「ほんのちよつと前でしょ。別に、久しぶりじゃない」

人懐っこい、子犬のような表情。友香の邪気のなさが、疎ましい。

未佳は歩き始めた。

「待ってよ」

制服を着ていない友香にも、未佳は違和感を覚えた。薄く化粧をしているらしい。それが似合っていない。

「スーツ似合うよ。カッコイイ」

友香が笑う。

「帰るの？」

「帰る」

「待ってよ。一緒に帰ろう」

友香とは三年間同じクラスだった。でも、一緒に帰ったことがあっただろうか。覚えていない。ということは、なかったのだ。

「未佳ちゃん、家どこだっけ」

「厚別」

「だよ」

「話した？」

「聞いた気がする」

信号機が青の点滅を始めていた。早足で渡る。友香もすっかりついてくる。友香は未佳より頭半分ほど背が低い。歩幅が違うのか、友香の歩き方がまた散歩をしている子犬のようだった。悪気はない。ただそう思えた。

「あたしは白石だから。電車だよ」

「あんた白石だっけ」

「言わなかったっけ」

「聞いたかもしれないけど忘れた」

「冷たいなあ」

冷たいんじゃない。興味がないだけだ。冷たいのは風。やはり、髪を切りすぎた。

「髪切っちゃったんだ」

襟足を気にしていたら、友香が言った。

「大学生に見えないよ」

友香は未佳の顔をのぞき込むように歩く。

「なにに見えるの」

「オーエル」

「OL？」

「かな」

未佳は立ち止まる。勢い余った友香が二、三歩行き過ぎる。

「怒った？」

笑みを消して、友香。

「怒ってない」

「なんで？」

「そんな、疲れて見えるかなって」

「疲れて？」

「会社員っぽって」

「違うよ。大人っぽって」

また短く嘆息した。疲れてるのは間違いない。

「雰囲気、変わった」

ちよっと媚びるような、そんな表情で友香が並ぶ。

「私は、変わってないよ」

歩き出そうとした。友香がなにかを言おうとした。その間を、車のクラクションが割った。未佳は歩き出した。友香が振り向いた。またクラクション。友香が立ち止まった。

「ねえ」

友香。無意識なのか、未佳の左腕をつかんでいた。

「なに」

「あの車」

友香が言うのと同時に、また短くクラクション。友香が腕を引く。未佳も振り返る。その先に。

「あ」

黒い車。交差点を少し過ぎた路肩に停まっていた。

「なに、未佳、知ってる人？」

見覚えのある車体。黒のBMW528i。

「親」

吐き出す息に言葉を混ぜた。

「親？ 未佳の？」

未佳はBMWを向き、睨んだ。父親だ。

「ねえ」

「ごめん、浅田。先に帰って」

未佳は返答を待たなかった。友香の腕を払う。触れた友香の右腕は、細かった。

「未佳ちゃん」

停まっているBMWは、窓も開けず、じつと未佳が近づくの待っている。ウインドシールド越しに、運転席に点る小さな火が見える。煙草の火だ。大股で歩み寄る。対向車が未佳の目前で急停止、またクラクションが住宅街に響く。かまわず、未佳、BMWの助手

席のドアを開けた。

「何してる」

鋭い叱責が耳を打つ。しかし、未佳を射たのは声だけで、視線も顔もこちらを向いていなかった。

「何しに来たのよ」

ドアを開けたまま、未佳。

「迎えに来ちゃいけないのか」

「いまごろ」

「乗れ。ほかの車の邪魔だ」

「邪魔なのは私じゃないの」

父は煙草をひときわ大きく吸い、盛大に煙を吐く。そして、猛禽のような目をして未佳を向いた。

「乗りなさい」

この目が嫌いだった。いや、苦手だった。小さいころから。今でも。未佳は黙って助手席に乗り込み、力を込めてドアを閉めた。煙い。

「お店はいいの」

「お前に心配してもらわなくてもいい」

灰皿に煙草を押しつけ、父はまた未佳を向いた。

「せっかく時間を空けてきてやればそれか。ほかに言葉があるんじゃないのか」

「頼んだわけでもないのに。ほかに何を言えばいいのよ」

未佳はもう父を向かない。黙ってシートベルトを締めた。

「家まで送る」

車は静かにスタート。父はスーツのポケットから煙草を抜き、ガラスを弾くような音を立て、ガスマイターでまた火を点けた。未佳は自分の側の窓を全開にした。すると父が開いた窓を閉じた。未佳は目を閉じる。何を言っても無駄だ。なぜこの車に乗り込んでしまったのか。友香のくだらないおしゃべりに付き合いながら、列車に乗り、そして友香と白石駅で別れ、一人、新札幌の駅からバス通を

歩いて帰ればよかったのだ。でも、父を前にして背を向け、歩き去るのは、逃げるようで嫌だった。この男に後ろ姿をみせるのは、耐えられなかった。

父が運転席側の窓を開けたようだ。空気が流れる。煙草の煙が我慢ならない。未佳は無性に髪を洗いたくなつた。目も痛い。首も痛い。背中も痛い。何もかも痛い。

車が止まった。薄く目を開く。赤信号だった。

友香がいた。BMWに気付いていない。先ほど抱いた感想はそのまま、友香は散歩中の子犬のようだった。きよるきよるしている。一人、駅に向かっていて。信号が変わる。未佳は友香の背中を目だけで追う。さよなら、浅田。加速する車窓から、友香が消える。

今度こそ、未佳は目を閉じ、意識的に意識を遠ざけた。隣に誰がいる？ 考えないことにした。

## シャッター

### 二、シャッター

カバンにはテキストもノートも入れなかった。メモ帳代わりのルーズリーフと、一日数ページも読み進めない読みかけの小説と、カメラを一台。

講義が始まって、未佳はまともに講義に出なかった。ただ、気が向いた内容のときだけ、それも途中から出席するか、途中退席した。一般教養科目だから、学生も多く、遅刻しようが途中退席しようが、講師たちは何も言わなかった。高校生のころからは考えられない自分の振る舞いで、そのことを考えると、苦笑した。高校の授業をサボったことなんてなかった。

色彩に乏しい早春。プラットホームの下で、フキノトウは背を伸ばしている。けれど、まだ寒い。木々は冬枯れのままで、道ばたにはゴミが散らばっていた。

入学式から一週間あまりが過ぎていた。

未佳は毎日家を出る。毎日、朝七時過ぎに家を出る。行ってきますも、行ってらっしゃいの声もない玄関を一人、出る。バス通に出ると、ほぼ決まった場所で、ターミナルに向かうバスに抜かされる。薄曇りの日が続く、未佳は薄手だが、コートを手放さなかった。毎日決まった快速電車に乗った。新千歳空港からやってくる電車は、いつもスーツケースやアタッシェケースを抱えた会社員と、制服姿の高校生で埋め尽くされていた。列車は白石にも停車したが、友香と会うことは一度もなかった。札幌駅の雑踏を歩き、ディーゼルエンジンの排気を吸い、北区のはずれへ向かう気動車は、始発なのに、決まって未佳の席がなかった。

一週間あまりの時間。

鉄道高架の上から見える街並み。

デッキに立ち、汚れた窓から石狩平野に続く家並みを見る。通学三日目、未佳は初めてシャッターを切った。デッキには未佳一人、車内には空席も見えたが、未佳はデッキに立ち、カバンからカメラを取り出して、フォーカスリングを回し、露出を決め、撮った。レールを過ぎる音とシャッターの音が同期した。

いくつもの駅を過ぎる。ドアが開くたび、空気が変わっていく。街中の空気から、郊外の空気へ。日に日に、雪解けのあの匂いが薄れていく。土の匂いが強くなっていく。季節の匂いが変わっていく。シャッターを切る。温度や匂いも写っていればいいのに。そう思う。誰に見せる？

講義にはまともに出なかったが、大学には毎日通った。建物の隅々まで足を運んだ。研究棟から、学生会館の入り口、学生生協でパンを買い、ベンチが並ぶ中央ロウンでペットボトルからお茶を飲んだ。学生自治会の建物や、寮の場所も覚えた。講義に出ないで、キャンパスの配置にだけ詳しくなった。グラウンドを見に行き、砂埃で涙を流した。ここは、石狩湾からの浜風がまともに吹き込み、とにかく寒い。

そこでシャッターを切った。何を撮るわけでもないのに、写真ばかり撮った。カバンの中には、入学式で渡された履修要項が入ったままで、かろうじて四十八単位分の履修登録を済ませたが、時間割はまるで頭に入らなかった。掲示板も毎日見た。いや、掲示板を眺める学生たちを見に行った。一人でブラブラしている学生もいたし、けれど大半がグループだった。二人以上。

父のBMWに乗り込んだあの日以来、友香とは一度も会っていない。学部が同じなのかどうかも知らない。未佳が訊かなかったからだ。気まぐれで顔を出す講義でも、友香の姿は見えていない。同じ高校から入学しているはずのクラスメイトの姿も見えていない。いや、誰がこの大学に入学しているのも、本当は覚えていない。

入学式からこっち、キャンパスの中で一度も自分の声を聞いてい



なかった。世の中、一人で過ごすのなら、しゃべる必要もないのかもしれない。生協でパンを買うときも、食堂でチキン竜田井の食券を買うときも、食べるときも、しゃべる必要がなかった。チキン竜田井が、一度食べれば二度目はいらぬという味だと、誰かに言う必要もなかった。まずさに文句を言う代わりに、昼食時を過ぎ、がらんとした食堂で、未佳はカメラをテーブルの上に置き、雲間から差し込んだ久しぶりの日だまりに自分が座り、セルフタイマーでシャッターを切った。じつとレンズを見た。カメラは重ねた二冊の文庫本の上に置いた。構図を確かめたわけではない。でもかなりの広角だ。きつと写ってる。陽射し。暖かいと思った。

「ねえ」

カメラを文庫本の上に置いたまま、未佳は陽射しにぼんやりとしていた。簡素な椅子に身体をあずけて、目は開いているけれど、何も見えていなかった。だから、声がしても、それが自分に向けられたものだとはまるで考えていなかった。

「ちよつと」

瞬きもしていなかった。肩をつつかれて、我に返った。

振り向いた。

ネコがいた。大きな目に大きなメガネの、あの子だ。

「何してるの」

トレイの上にあのチキン竜田井とサラダと豆腐を載せて、緑里が立っていた。

とつさに声が出なかった。

「久しぶり」

相手は自分のことを覚えているようだ。もちろん、未佳も緑里を覚えていた。スイッチを切ってしまったから。

「いい？」

未佳が返事するより前に、緑里は未佳の対面に腰を下ろした。

「何やってるの」

「別に」

「全然講義に出てこないでしょ」

小気味いい音を立てて、割り箸を割る。目を浴びた緑里の髪が栗色に染まっていた。未佳と似たような髪型。未佳よりも頭三分の二は緑里の方が背が低い。

「私のこと、覚えてる？」

「覚えてる」

「名前は？」

「広島」

「よくできました。下の名前は？」

「ごめん」

にやりと笑い、緑里は井からチキン竜田をかじった。一口で半分が消えた。

「てかね。私、実はあんたの名前知らないんだよね」

一口を嚙下してから、緑里。

「私は、広島緑里って言います。広島から来たんじゃないやありません。東京です。覚えてる？」

「覚えてる」

「よくできました。で？」

豆腐を切り崩して、食べる。鰹節とネギが載っている。緑里がネギを噛む音。食堂は静かだった。

「名前、教えてよ」

「積森」

「つもり？」

「積森」

「どんな字？」

「微分積分の積に、森林公園の森」

「なんで音で説明するの。わかりづらい。積み木の積みに、森のクマさんの森ね」

山盛りのサラダからトマトを一かけ口に入れ、目だけはじっと未佳を向く緑里から、森のクマさんというフレーズが妙におかしい。

「なによ」

緑里がじろりと目を開く。

「森のクマさん？」

「散々脅されたからね。北海道なんかに行ったら、クマに食われる  
って」

「まさか」

「そんなもんよ。私もまさか、四月に吹雪くとは思わなかった。ま  
じめに風邪引いた。でさ。積森さん。下の名前は？」

「未佳」

「みか？」

「未来の未、人偏に土ふたつの佳」

「よくできました。未佳ね。よしよし」

緑里は食べるのが恐ろしく早かった。急いでいるように見えない  
のに、丼も豆腐もサラダも、望んで緑里の口に飛び込んでいくよう  
に消えていく。ただ、その分顎がよく動く。よく噛んで食べている。  
たまに見せる歯は真っ白だった。

「なによ」

視線を受けて、緑里。

「よく食べる」

「こつ見えても、陸上部だったのよ」

「そつ」

「そつ。未佳ちゃん」

誰かと会話をするのも久しぶりだったが、名前を呼ばれたのも久  
しぶりだった。

「苗字の方がいい？」

「どつちでもいい」

「了解」

勢いのいい食べ方だったが、下品ではなかった。好物を目の前に  
したネコ。やはり緑里はネコだ。友香のような媚びる態度がない。

「写真好きなの」

二つめのチキン竜田をかじり、嚥下してから緑里が言う。

「別に」

「記念写真って感じでもなかった」

「見てたの」

「見ようと思わなくなっただって、見えた。あそこから」

緑里は箸を置き、右手で食券売場を指した。

「変なやつがいるって思ったら、キミだった」

また箸を持ち、丼が空になる。豆腐は、いつの間にかもう緑里のお腹の中だ。鰹節のかけら、ネギの一切れ残っていなかった。

「学食で写真撮ってるやつ、初めて見た」

「そう」

「うん」

最後のトマトを飲み込んで、緑里は食事終了。見ている未佳は空腹になった。さっきパンを一個食べた。それで十分だと思っていたのに。

「なんで講義出てこないの」

コップから水を一口。

「別に」

「第一印象と違うな」

「なにが」

「優等生っぽく見えただけだ。未佳ちゃん」

「どついう風に」

「勉強しに来たんだなあって思ったた」

「そう?」

「めずらしいって。まあ、今も思うけど。学食で写真撮ってるやつはめずらしいよ」

水は少しずつ飲むようだ。小さなコップに水はまだ半分。

「何履修してるの」

「覚えてない」

「履修登録したんでしょ」

未佳はカバンから、教務課から返却されたきりの履修登録票を差  
しだした。

「なんだ。けっこう私とかぶってるんじゃない。心理学、美術史ね。  
今日はちよつと面白かったよ」

「今日のな」

「知らないの？」

「一回も出てない」

「何しに来てるのよ。もったいない。面白いよ。出なよ。ノート貸  
してあげるから」

言つと緑里はコップに残った水を一気に飲み干した。

「出ようか」

「どこへ」

「外。食べたから」

緑里はもうトレイを持って立ち上がっていた。

未佳は文庫本の上のカメラと、文庫本と、履修登録票をカバンに  
入れ、席を立つ。

「ごちそうさま。緑里は食器返却口で一言投げて、未佳に笑う。

「あんまりね、旨くないよね」

「なに」

「チキン竜田。人気投票第三位とか書いてあったから食べたのに。  
昨日食べたカレーの方がマシだったな」

未佳は笑う。声が出た。

「なによ」

「カレーも食べたんだ」

「主だった奴らは、一通り食べたよ」

「私も食べた。カレー」

「ね、カレーの方がマシじゃない？」

「お肉が入ってなかった」

「私のは入ってた」

緑里が笑った。子どものような笑顔だった。

「よかった」

食堂の出口へ歩きながら、緑里。

「キミ、笑える人なんだ」

出口で立ち止まり、緑里は未佳を振り返る。大きな目を細め、また笑った。

緑里は歩くのが速かった。どちらかというとせつかちな歩き方で、見た目がネコでも、足取りはとてもネコ足とは呼べない。散歩中の犬のようだ。

「暖かい暖かい」

前を向いたまま、緑里が言う。どこか棒読み。独り言のようだけれど、それはきつと未佳に聞こえるように言ったのだ。

緑里は学生食堂を出て、建物に囲まれた中庭……中央ローンまですたすたと行く。未佳はついていく。何十分か前、未佳がパンをかじったベンチが見えた。緑里は早足のままベンチへ向かい、そして身体を投げ出すように座った。座り、自分の隣を平手で二回叩いた。未佳は緑里の隣に座った。木製のベンチ。日を浴びてやや暖かい。

「ひどい世の中」

座るなり、緑里はぞんざいに言う。

「なにが」

未佳が問うと、緑里は視線だけ未佳に向け、持っていたカバンから、ベコベコにへこんだドロップ缶のようなものを取り出した。

「未佳ちゃんは、」

ドロップ缶には煙草が入っていた。

「喫わないの？」

ドロップ缶はシガレットケースというわけで、未佳にはドロップ缶に見えたが、銀色一色で飾り気のない箱だった。蓋を開き、ポンと一本煙草を抜き出して、緑里はくわえた。慣れた手つき。

「喫うんだ」

煙草をくわえ、ごついオイルライターで火を点けようとしていた

緑里の手が止まる。

「今さらだけど、喫ってもいい？」

「どうぞ」

「悪い」

父のガスライターはきざったらしいが、緑里のオイルライターは、昔のアメリカ映画に出てくる、ちよつとくたびれた主人公のような、そんな雰囲気だった。やたら大きな音がする。

「どこ行っても禁煙。ひどい話。学食は全面禁煙。ここでしか喫えないんだもの」

大きく煙を吸い込み、吐き出す。緑里は目を細めた。なかなか堂に入った喫い方だ。

「喫わない方がいいよ、こんなもの」

煙を漂わせて、緑里がつぶやく。

「やめればいいのに」

「未佳ちゃん」

「なに」

「喫えばわかるよ」

ベンチの背にあずけていた身体を起こし、頬杖をついて緑里。

未佳は、膝の上に載せたカバンから、カメラを取り出した。

「広島さん」

緑里は返事をせず、また視線だけ未佳に向けた。

「『広島さん』ってのは、やっぱりね、じっくり来ないね」

「緑里さん」

「『緑里さん』。まあいいや。何？」

「撮ってもいいかな？」

「なにを」

「広島さん……緑里さん」

緑里は、口から煙を爆発させるように吐き出した。

「私を？」

「いやかな」

灰をベンチに並んで置いてある灰皿に落す。

「私でよければ。物好きなんだね」

未佳はファインダーをのぞく。二人の背中側から、やや高い陽射し。露出は開放気味。親指でフィルムを巻き上げて、シャッターを切った。

一枚だけ。

「一枚でいいの」

「ありがとう」

煙草を持ったまま、今度は緑里は笑った。

「様になつてる」

「なに？」

「構え方。趣味？」

「趣味つて」

「写真」

趣味、ではないと思う。

「モデル料もらわなくちゃ」

緑里はさらさらモデル料など取るつもりもない口調で言う。

「何がいい？」

「いらないよ」

言つて緑里は、煙草を灰皿に捨て、ドロップ缶が入っていたカバンに手を突っこむ。ごそごそ手が動いて、出てきたのは、カメラだった。

「広島さん？」

「まあ、私のは趣味だから」

未佳のカメラと大差なく、オートフォーカスもなにもついていない、やたらと角張ったカメラだった。

「未佳ちゃん、一枚撮らせてくれたら、それでいいよ。これで相殺」  
未佳の返事を待たず、緑里は素早く構え、左手の人差し指と親指が小刻みに動いたかと思うと、シャッターが切られた。

「いい顔だ」



「広島さん」

「こういうのはね、不意打ちがいいの。断つちゃダメよ」

自分がどんな顔をしていたのか、わからない。けれど目はレンズを向いてしまった。思いつきりカメラ目線だ。

「現像したら見せてよ。私のも見せるから。それで、おしまい。差し引きゼロ。チャラ。いい？」

緑里はカメラをカバンにしまい、入れ替わりにまたドロップ缶を取り出して、一本くわえて火を点けた。

「吸い過ぎか、さすがに」

緑里はまた笑った。

未佳は思った。

不意に、姉の顔が浮かんだ。

未佳は、姉を呼んだ。

この人と、友達になっても、いいかな。

本当は、私が会う人じゃなかったのに。

目の前の緑里は、笑顔だった。

やっぱり、ネコみたいな顔だと思った。

## クチナシの白

### 三、クチナシの白

レールが鳴っている。それが聞こえる。見上げる。盛土の上を、赤い機関車に牽かれて、貨物列車が走ってくる。未佳はペダルをこいでいた足を止め、追いついていく貨物列車を見送った。

貨物列車が行ってしまうと、国道への交差点を間近に、あたりは静かになった。鳥声が聞こえる。不思議と車が走っていない。未佳はまたペダルをこぐ。

薄曇りだった空は、青みが増していた。

姉に、会いに行く。

もう一人の、「私」に会いに行く。

土曜日。未佳は家を自転車に乗って出た。普段向かう駅とは反対へ、ペダルをこいだ。今日は暖かい。十分も自転車に乗っていると身体が熱くなった。今日なら、切りすぎた髪を意識しなくてもいいくらいの気温。木々はまだ寒々とした枝を広げているが、もしかすると桜の木は、花のつぼみを膨らませているのかもしれない。桜の季節が近づくと、未佳はなぜか気ぜわしくなる。花が散らないうちに、花を見なければ。

前方の信号は青。ギヤを一段落して、さらにペダルへ力を入れる。国道を渡り、上野幌の駅を通り過ぎ、道は急な上り坂になる。歩道がないので、未佳を追い越していくトラックが怖いくらいに近いけれど、この道しかなかった。坂の頂上を迎えるころ、視界が一気に開ける。送電塔と、まだ土の匂いが真新しい畑。遠くに恵庭岳が見える。わずかに首を巡らせれば、羊ヶ丘のドーム、藻岩山、手稲山まで見渡せる。空気は白っぽく漂っていたが、淡いシルエットになった市街地や山々は、冬に見るそれとは表情が違う。冬の日の、

暖かい蒸気が立ちこめる部屋の中のような、そんな空気。山の頂はまだ白い。冬は名残惜しいのか、春に追い立てられるように、それでもまだこのあたりをうろついているようだ。

身体が熱い。上り坂でやや息が上がっていた。風はほとんどない。ペダルをこぐのをやめると、チェーンが空回りする音と、またどこかからか鳥の声がした。

丘陵を道が続く。左手は谷間の雑木林が広がり、やがて、木立の間に白い壁の建物が見えてくる。慣性で進んでいた自転車を、未佳は再び加速させる。

道路からそれ、小さな木立の角を曲がると、エントランスが未佳を迎える。けれど、ちっとも歓迎的ではない。素っ気ないガラスの扉と、受付。未佳は自転車を降り、施錠をしてから息をわずかに多く吸い込み、エントランスに入る。受付の事務係はもう顔見知りでも最初のころは、怪訝な顔をされた。すぐには通してくれなかった。事務係の子は、未佳の顔をじっと見たあと、事務室の別な誰かを呼び、未佳を指さした。それはまるで、映画で見る、スパイが敵国の空港のパスポートコントロールで足止めされるような、そんな雰囲気だったのだ。無理もないかな、そうも思うけれど、事務係の怪訝な表情を見るにつけ、未佳は複雑な思いになる。なぜなら、ここにはもう一人の私がいるからだ。務係の子はきつと、ここにいるもう一人の自分……姉の宏佳と、見舞いに来た未佳を誤認したのだ。エントランスの空気は冷えていた。待合用の長いすに、外来なのだろう、未佳と似たような年頃の女の子が、未佳の母親と同じような年頃の女性と座っていた。女の子はうつむき気味で、ハンカチをずっと握りしめていた。

未佳は受付に来訪を告げた。

「未佳さん、こんにちは」

事務係の子は、未佳を名前で呼ぶ。その方が混乱がないからだ。

「こんにちは」

「カバンに、なにか入ってますか？」

未佳は背負っていたデイパックを降ろし、開いて見せた。

「写真です」

「ほかに」

「何もないです」

手荷物検査もまた、スパイ映画の空港のようだ。刃物、ロープ状の物、ライター、その他諸々、人体に危害を加えられる物体はすべて持ち込みが禁止なものも、飛行機に乗り込むのと似ている。さすがに金属探知器やX線探知機は置いてないけれど。

事務係の子に促され、未佳はエントランスから廊下に進む。廊下には防火扉のようなドアがあり、これを開くと入院病棟だ。未佳がドアを通ると、鍵が閉まる音がした。嫌な音だといつも思う。帰りは、ドアの横についているインターホンで退室を告げる。

エントランスや受付、外来用のスペースは、建物のほんの一部に過ぎず、この病院のほとんどは、入院病棟で占められる。すべてを見たことはないし、見たいとも思わないが、時折どこからピアノの音が聞こえ、それに合わせて誰かが歌う声が聞こえた。

廊下を過ぎると、まず談話室にたどりつく。名前のとおりの談話スペース。療養服姿の患者はほとんどおらず、みんな私服だ。スウエットやジャージ姿の人が多いほか、大学の談話室とそれほど変わらない。テーブルには、マグカップや湯飲みを置いて静かに会話する人々の姿がある。何人かが未佳に気付き、会釈をよこす。入院歴が浅い人だと、最初のころの事務係の子のような顔をするが、未佳が目当ての患者と相對するのを見て、みんな納得する。

「お姉ちゃん……」

彼女は、窓際のテーブルにいて、ぼんやりと外を眺めていた。淡いピンク色のトレーナーを着ていた。肩まで伸びた髪は、まもなく背中に届きそうだ。未佳はあと数歩のところまで足を止めた。気配を感じたのか、彼女がこちらを向く。瞬き。そして、ゆっくりと表情が変わる。微笑み。

「お姉ちゃん」

彼女の口が動く。

「こんにちは」

未佳は残りの距離を埋める。

「お姉ちゃん、久しぶり」

彼女……宏佳の声はややかすれていた。

「座つてよ。ねえ、久しぶり。学校の帰り？」

「今日は、休み。土曜日だから」

未佳は宏佳の向かいに座る。正面から宏佳を見る。顔色はよかった。けれど、すこしまた痩せたかもしれない。でも言えない。

「元気にしてた？」

未佳が言う。（お姉ちゃん）と続けようとしたが飲み込んだ。

「元気だよ。平気」

「声は、聞こえるの？」

「聞こえないよ。大丈夫。早く帰りたい」

「もうすぐ、帰れるよ」

「早く、帰りたい」

潤んだような目。未佳は思う。よく似ている。自分に。高校生のころの自分に、いまの宏佳はそっくりだった。

「髪、切り過ぎちゃったよ」

未佳。宏佳の目をまっすぐ見られない。それがもどかしい。

「似合ってる」

宏佳は言うつと、耳にかかった自分の髪に指を通した。未佳ははつとする。伸びた髪に指を絡ませるのは、以前、宏佳に指摘された自分の癖だったからだ。髪を切りすぎた今は、癖を覚えている指が空を搔くだけだが。

「何か飲む？」

宏佳は笑顔のまま。

「うん」

「お茶でいい？」

「いいよ」

宏佳はバネ仕掛けの人形のように立ち上がり、談話室の片隅にある給湯コーナーへ。歩き方がぎこちなかった。宏佳が痩せたと思っただのは間違いではなかった。やや大きめのサイズのトレーナーにジヤージをはいているが、もともと華奢だった身体がまた細く見えた。未佳と同じく、女の子にしては高い身長がよけいにそう見させた。

宏佳は二人分のカップを持って戻ってくる。未佳は彼女が戻ってくるまで、次の言葉を探し続けていた。けれど、適当な言葉が見つからない。なんて言えばいいんだろう。

「緑茶で、いいよね」

「うん。ありがとう」

自転車をこいだ余韻はもう消えていて、談話室は暖かかったが、未佳の身体はもう冷えていた。湯気を立てているお茶を一口すすった。緑色をしているが、お茶の葉の香りも味もほとんどしなかった。ただ熱い。

「お姉ちゃん、どうしてたの？」

宏佳が訊く。

「どうって、何も、特に」

「絵、描いてるの？」

「描いてない」

「ええ」

お茶を飲む。まだ熱い。

「見せてよ。早く描いて」

「私、絵は、得意じゃないから」

「ウソだよ。私の方だよ。絵はダメだなあ」

絵が苦手なのは、私の方だ。未佳は顔を伏せる。いつもこういう展開になる。

宏佳は、面会に来た未佳を、「お姉ちゃん」と呼ぶ。つまり、未佳のことを宏佳だと、そう思っている。自分のことを、妹である未佳だと信じて疑わない。

宏佳は、絵が得意。

未佳は、絵が苦手。

本当のことだった。未佳はまるで絵が描けない。それに、描きたいとも思わない。何を描いていいかわからない。だから写真を撮るようになった。

宏佳は、絵が得意だ。白い紙があれば、それがノートの一ページでも、学校で配られる連絡文書でも、画用紙でもキャンバスでも、そこに鉛筆やペンを走らせて、何でも描いた。

（未佳のこと描いてあげるよ）

いつか、そう言って未佳のポートレイトを描いてくれた。ものもの十分ほどで、スケッチブックのページに、難しい顔をした未佳の表情が描かれた。

（自画像になっちゃったね）

未佳が言った。スケッチブックには、描き手と同じ顔があった。

（髪の毛の長さが違うでしょ。それに、私には同じ顔には見えないよ）  
あれは宏佳の部屋だった。占めきったクローゼットのような匂いもしない、生きた部屋。いつのことだっただろうか。

「ねえ」

緑里の言葉を借りれば、それはまさしくスピーカーで、しかもスイッチが見あたらない。宏佳は未佳を前にしゃべり続ける。ごめん、思っただけれど、未佳は話を途中で止めた。

「なあに、お姉ちゃん」

少女の口調で、宏佳が問う。

自分は、こんな幼い「妹」だったのだろうか。宏佳の目には、そう見えていたのだろうか。違う。目の前にいるのは宏佳で、私じゃない。だって、私はここにいます。

「写真、持ってきた」

デイパックの中から、アルバムにした写真を取り出す。ふだんの、未佳の視線。それらを切り取ったもの。

「お姉ちゃんも写真、撮るんだ」

「下手だけどね」

アルバムを開き、宏佳を向けて差し出す。

「きれい」

宏佳がつぶやく。

夕日。

街灯。

雪。

凍りついた落ち葉。

灯りの点った家。

スナップのつもりで撮った。日常の風景。意匠も何もなく、主題もない。あえて主題をつけるなら、それは自分の視線ではなく、宏佳の視線だった。

「覚えてる？」

無言でページをめくる宏佳に、未佳が言う。

「家の近所。これは、森林公園。わかる？」

「うん」

「本当？」

写真のほとんどは、未佳が宏佳と歩いた場所だった。

「これ、お姉ちゃん？」

何枚かはセルフポートレートになっている。公園のベンチや、コンクリートのフェンスにカメラを置いて、セルフタイマーで撮った。できるだけ平淡な表情を心がけて。写っているのは、未佳自身であり、宏佳自身だ。撮り手の意思はそこにある。

「学校の帰りかな、これ」

宏佳が指さした一葉は、制服姿の未佳が写っている。宏佳が通った通学路で撮った。

「通学路。覚えてる？」

未佳が着ているのは、なじんだセーラー服ではなく、宏佳が着ていたブレザー。宏佳のクローゼットから取り出して、借りて着た。ネクタイの結び方がわからず、苦労した。だからこの写真も、セルフポートレートだが、未佳は宏佳を撮ったつもりだ。未佳の髪型は、



高校生のころの宏佳と同じくらいだった。逆に、いまの宏佳が、高校生のころの未佳と同じ髪型になっている。肩まで伸びた髪。それが、背中に届きそうだった。

「いつ撮ったの？」

「このあいだ」

「へえ」

未佳が宏佳の制服を着ているのに、気付いていない。気付いていないのかもしれないが、否定している。きつと、そうだった。

宏佳はまたしばらく何も言わず、未佳が持ってきたアルバムをめくった。カメラ店がサービスでつけてくれる簡単なアルバムは、今回三冊用意した。宏佳の通学路や、家の近所、街の夕景や、コンビニエンスストアの灯りや、森林公園の塔、そして自分。それを宏佳はだまってめくった。ときどき、つぶやくように感想を述べた。

未佳も何も言わず、宏佳がなにかを問うてくれば、それに短く答えた。

宏佳が、姉が姉であることを拒絶してから、もう一年近い。今の宏佳は、宏佳ではなかった。身も心も、すっかり自分を妹の未佳だと思い込んでいる。周りがそれを指摘すると、理性を失ったように怒った。ときに怒りは宏佳自身を傷つけた。ページをめくる宏佳の左手に、小さな切り傷のあとを見て、未佳は割れた鏡を思い出す。粉々に砕け散った、家の洗面所の鏡だ。

日は暮れていた。未佳はベッドの上で雑誌をめくっていた。初雪が溶けた晩秋の夕方だった。風が強く、窓の外の電線が風に鳴いていたのを覚えている。それ以外に音は聞こえず、静かだった。未佳の家は住宅街の奥まったところがあり、通りからも遠い。静かだった。

唐突に、大きな音がした。ガラスが砕けるような音。窓を破られたような、大きな音。未佳はページをめくる手を止めた。音は階下から聞こえた。はっと半身を起こし、反射的にドアを見た。

また聞こえた。ガラスの割れる音。未佳はベッドから降り、ドアを開け、階段を駆け下りた。何が起きたのかわからなかった。

階段は白熱灯の灯りだけで薄暗い。廊下も同じ。階段を下りきり、廊下に出ると、母の音が聞こえた。声だけだ。言葉になっていない。未佳は廊下の入り口で足を止めていた。何か、よくないこと。よくないことが起きた。それだけがわかった。

ガラスを踏むような音がした。母の声。なにしてるの？ そう聞こえた。未佳は足を進めた。洗面所だ。遠いはずがないのに、洗面所のドアが遠く感じた。近寄ってはいけない、行ってはいけない。見てはいけない。母が姉の名を呼んでいた。

のぞき込むようにして、未佳は洗面所の前に立った。

まず目についたのは、割れたガラス。それは鏡だった。視線を上げると、洗面台の鏡が粉々に砕けていた。

赤いもの。

床に、洗面台に、赤いものが散っていた。

血？

母がいた。

ヒロちゃん。

母の音が震えていた。

母の向こうに、姉がいた。

洗面台に両手をつき、うつむいていた。その肩が震えていた。小刻みにはない、数歩分離れて立つ未佳の目にもはつきりわかるほど、宏佳の身体が震えていた。まるで、高熱に罹ったように。その宏佳の腕から血が流れていた。割れたガラスで切ったのだ。

ヒロちゃん。

母が姉を呼ぶ。けれど、震える身体を抱きとめようとしなかった。わずかに離れて、ただ母も肩を震わせて、立っているだけ。なにしているの？

違う、違う。

宏佳の口から、つぶやきが漏れていた。

違う、違う。私じゃない。私じゃない。

未佳は母を押しつけ、宏佳に寄った。

お姉ちゃん。

宏佳を呼ぶ。

お姉ちゃん、どうしたの。

自分の声が遠くから聞こえるような気がした。

誰？

顔を上げた宏佳に、未佳は、宏佳の腕に触れようとしていた左手を引っ込めた。

宏佳の目が大きく見開かれていて、その焦点がどこにも合っていない。顔面は蒼白で、やはり高熱にうなされた子どものような表情だった。首筋と額に小さな汗が浮いていた。

お姉ちゃん。

誰？

宏佳は未佳の呼びかけに、小さくつぶやく。

私じゃない。私は違う。違う。

目を見開いたまま、瞬きもしないで、宏佳はうわごとのように、つぶやく。

お姉ちゃん。

宏佳の口がそう言った。

お姉ちゃん、私じゃない。私じゃないよ。違う。

宏佳の左腕は大きく切れており、血が流れていた。流れた血が床に散り、割れた鏡に赤く滴っていた。

あつ。

鋭い痛みにも、未佳は顔をしかめる。割れた鏡を踏んだ。

足を上げると、爪切りで切った爪ほどの大きさで、ガラスが右足の裏に刺さっていた。未佳は宏佳に触れようとして引っ込めた左手で、鏡の破片を引き抜いた。未佳の足からも血が流れた。ガラスは案外深く刺さっていた。

顔を上げた。

母が両手で自分の頬を押さえていた。宏佳は、やがて力尽きたように、その場にへたり込んだ。割れたガラスがまた散った。

お姉ちゃん！

未佳はなにが起きたのかわからなかった。血が浮き出す右足をそのまま、へたり込んだ宏佳に寄り、肩に手を触れた。華奢な、いつもの姉の肩だった。違うのは、宏佳の視線。

射るような目。

けれど、視線が定まらない。

宏佳は泣いているような、けれど笑っているような、しかしなにかにおびえているように、全身を震わせて、またつぶやいていた。

違う。違う。違う。違う。違う。

未佳は訊けなかった。

なにが違うの？ お姉ちゃん、なにが違うの？

宏佳が切った方の左手で、未佳の右腕を握った。強い力だった。痛いくらいに。

宏佳の目が未佳を向く。視線がぶつかる。助けを求めるように。

違う、違う、違う。

宏佳が、宏佳であることを認めなくなった、最初の日。

未佳が知るかぎり、それが最初の日だった。

気付けば宏佳が煎れてくれたお茶は、猫舌の未佳にちょうどいいくらいの温度まで冷めていた。残っていたお茶を、全部飲んだ。

宏佳はアルバムをまだめくっている。ところどころに散りばめた未佳自身のポートレート。宏佳はそれを未佳だとわかっているのだろうか。訊きたかったが、訊けない。

「ねえ」

お姉ちゃん、続けたかったが、言葉を止めた。

「なあに」

宏佳が顔を上げる。

「眠れてる？」

「平気だよ」

「夢、見ない？」

わずかな間。宏佳が未佳から視線をそらす。そして、考える。わずかな間が、そのまま沈黙になる。

「見る？」

「覚えてない」

「声は、聞こえる？」

また、間。逸れた視線が返ってこない。

「どうして？」

「ごめん。なんでもないよ」

まだ、きつと、宏佳には聞こえるのだ。

宏佳自身をここまで追いつめた、未佳には聞こえない声。

洗面所の鏡が粉々に砕けたあの日、宏佳は母に連れられて病院へ行った。未佳もついていった。父はいなかった。いない方がよかった。いなくてよかった。

病院へ向かう車の中で、母が運転席に座り、宏佳と未佳は後部座席に座った。父のBMWではなく、もっぱら母が乗っているヴェイツで、狭い車内は三人の、とりわけ宏佳の熱で、窓がわずかずくもりはじめていた。宏佳の左腕はタオルで縛り、未佳がその腕を宏佳の胸より上に保持して、空いた右腕は宏佳の肩を抱いた。病院に向かう間も、宏佳はずつと震え、取り乱す、という言葉がそのままに、理路整然としない言葉をつぶやき続けていた。

母が病院へ向かう曲がり角を三回も間違えた。家から近く、大きな病院は、駅から近い社会保険総合病院で、外来の診療時間は終わっていたが、救急外来に三人は駆け込んだ。

よく事故を起こさず病院にたどり着けたものだと思う。母は車を降りてからもおろおろと落ち着きがなかった。保険証を忘れたことに気付き、また車に戻ろうとしたが、未佳がポケットから保険証を取り出すと、待合室のベンチに座り込んでしまった。未佳は宏佳の

肩を抱き、彼女の左腕を持ったまま、処置室に入った。宏佳の左腕は縫合が必要なほどに深く切れていた。けれど、大事に至らない傷だった。処置は三十分もかからずに終わったが、問診で医師が、宏佳のただならぬ様子に気づき、待合室でしばらく待つように指示をした。ほどなくして現れたのは、未佳が予想したとおり、別の科の専門医だった。

「ごめんね。そろそろ、帰る」

カップが空になり、宏佳がアルバムをすべて見終えた。未佳はそつと席を立つ。

「帰るの？」

「うん。帰る。また来るから」

「いつ？」

「今度の休みに、また来るよ」

「本当？」

「本当」

「また、写真持ってくる？」

「たぶん」

「絵は、描いてないの？」

見上げる宏佳の目は、以前のものではない。もちろん、あの日、洗面所の鏡を自らの左腕でたたき割ったときの、あの目ではない。信じられない恐怖から逃れようと必死だったあのときの目ではない。けれど、優しくおとなしく、いつでも未佳の「姉」であったころの目でもない。もしかすると、宏佳自身がそう信じ込み、宏佳が演じる「未佳」の目は、あるいは本当に、以前の未佳自身の視線と似ているのかもしれない。だとしたら、私の目はこんなに幼い光を発していたのか。未佳は視線をほんのわずか交わし、椅子をテーブルに戻す。

「じゃあ、また来るから」

「また来て」

宏佳が笑った。落ち着いているようだった。宏佳としてではなく、未佳を演じているという意味において。ここにいるのは、宏佳ではない。未佳を、理想の妹を演じている宏佳だった。

未佳は宏佳に小さく手を振り、背を向けた。

いつも、宏佳は未佳を送らない。そして未佳は、談話室を出るまで、宏佳を振り返らない。振り向いてそこにいるのが宏佳であればいい。けれど違う。だから振り返らない。

談話室を出ると、廊下の手前に喫煙室がある。煙草の匂いが漂っていた。ふと、未佳は緑里を思い出した。そして、不意に鼻の奥がつんとした。知り合ってまだわずかな時間の緑里を、未佳は懐かしく感じた。会いたいと思った。友香や高校時代のほかのクラスメイトではなく、緑里を思ったのが不思議だった。

「積森さん」

喫煙所の前を通り過ぎようとして、呼ばれた。未佳は立ち止まる私を呼んだの？ それとも、お姉ちゃんを呼んだの？ が、未佳を呼んだ声はなじみのものだった。

「古河さん」

喫煙所の中で煙草を吹かし、痩せた身体を折り曲げている男。古河賢治。

「お見舞いかい。そうだよね」

「こんにちは」

賢治は半分ほど喫った煙草を灰皿に捨て、立ち上がる。

「ドア、開けたままじゃ怒られるんだよ。煙いってね。」

喫煙所の扉を後ろ手で閉め、未佳に並ぶ。細い。賢治の印象は初めて会ったときもいまも変わらない。とにかく、細い。

「お姉さんと会ってきたんだよね。そうだよね」

「はい」

賢治は談話室へは戻らず、廊下を進む。

「少し日に当たらないかい。中庭なら出られるんだよ」

賢治のあとを、中庭に出る。中庭といっても、狭い。芝生と小さな常緑樹が生えているほか、なにもない。ベンチが一脚あるが、すっかり風雨と雪に変色して、元の色もわからない。

「お姉さんの様子は？」

賢治はベンチに座る。未佳は、並んで立つ。

「変わらないです」

「でも、落ち着いているんでしょう」

「落ち着いてるだけです」

「君のこと、まだ『お姉ちゃん』って呼ぶのかい」

未佳はうなずく。

「今日は、何か持ってきたのかい」

未佳は返事をするかわり、宏佳に見せたアルバムを賢治に渡した。賢治も何も言わず、受け取り、開く。しばらく、ページをめくる。

建物に囲まれている分、日当たりが抜群というわけにはいかない。風はないが、談話室よりは寒い。でも、空気が澄んでいる。ごめん、談話室は、なんか、気圧が高いんだ。

「これ、君かい」

未佳のセルフポートレイトを指さし、賢治が言う。

「私です」

「言われなきやわからない。高校生のときの写真？」

「いえ、先週」

「制服着て？」

「姉に、見せようと思って」

「これ、お姉さんの制服かい？」

「はい」

「よく似てる。そうだよ。双子だもんね」

賢治の声は大きくはないが、聞き取りやすい。低い声。

「お姉さん、なにか言っていた？」

「なにも。この写真が私だって、わかってるのかどうかも」

「記憶をなくしてるわけじゃないから。わかってるよ。たぶん」



「そうなんですか」

「さあ。俺は医者じゃないから、わかんないけど」

賢治はアルバムを閉じ、未佳に戻す。

「先生とは話をしてるのかい」

「私ですか」

「そう」

「してません」

「どうして」

「先生に話を聞いたからって、姉が治るわけじゃないですから」

「そんなことはないよ」

「そうですね」

「たとえば、こういう写真を見せてもいいものか。訊いた方がいいんじゃないかい」

「何も言われませんでした。写真を見せてもいいか訊いたことはありません」

「でもそのときは、君がお姉さんの制服まで着て、お姉さんを演じた写真を撮るって言ったわけじゃないんだろう」

「言ってます」

「まあ、ごめん。俺は医者じゃないから、責めてるわけじゃないんだよ。そうだよ。君は、お姉さんに治って欲しいんだ。だからいろいろね、考えてるんだ」

未佳は返事を保留した。

「ここでも煙草を吸えたらいいんだけどね」

未佳はまた、大学の中央ローンのベンチで煙草を喫っていた緑里を思う。今日は大学の講義は公式にない。緑里はなにをしているんだらう。

賢治の横顔。

病的に細い。頬がこけている。

彼もまた、入院患者の一人だった。姉がここに入院し、まともに面会できないころ、廊下にうなだれる未佳の肩を叩いたのが賢治だ

った。けれど賢治は、未佳を宏佳だと思いこみ、病室に戻るよう声をかけたのだ。それがきっかけだった。

「でもね」

ベンチに座り、賢治が低く言う。より低く。

「君はたしかによく似てる。双子だから当たり前って言うけど、似てない双子もいる。なのに、君とお姉さんは、まったく同じに見える。君が面会に来ると、最初、ここの看護師だってびっくりしてたでしょ」

「はい。帰ろうとしたとき、止められました」

「逃げると思われたんだ？」

「はい」

「実際、君のお姉さんも、何回かここから出ようとして騒いだからな」

「そうなんですか」

初めて聞く話だった。

「今だからもう、君に言っても問題ないと思う。お姉さんが来たばかりのころ、夜になるとね、お姉さんは家に帰るって泣くんだった。声』が聞こえるってね。それは君も知っているか」

「声の話は。でも、家に帰りたがってたって、初めて聞きました」

「そうかい」

「はい」

日が雲から出ていた。直接は日が届かないが、空が明るい。

「まあ、俺の部屋から近いからな。君のお姉さんの部屋。聞こえちゃうんだよ」

「最初のころだけですか」

「あの病気は、いろいろあるようだけど」

賢治が立ち上がった。

「初期つてのは、荒れる人もいるんだそうだ。そのぶん、危ないんだって」

「危ない？」

立ち上がると、賢治は本当に細い。

「俺の病気とも違うから、本当のところはわからないけど。俺は『お前はニセモノだ』って声が聞こえるとか、テレビのニュースでアメリカの大統領に命令されるとか、そういう怖さって知らないけど、だけど、世界が明日にも終わってしまうんじゃないかって怖さはね、わかるんだ」

「はい」

「それはね、ほんとうに怖いんだ。できれば、全速力で走って逃げたくなるくらいにね。だから、お姉さんも、ほんとうにあの頃は怖かったんだと思う。考えてよ。そうだよ。全速力で逃げるんだ。危ないって意味、わかるよね」

全速力で。

「逃げる」

「そう。逃げないと、死んじゃうっていうくらい、怖い」

「古河さんも」

「俺はちよつと違うけど。説明するのが大変だから、まあちよつと違うけど、怖いものには変わりないかな。戻るかい。やっぱり寒いね」

賢治は一度、そつと宙を見上げて目を細めると、中庭から廊下に戻る。未佳も続く。

「帰るのかい」

「帰ります」

「笑った方がいい」

「はい？」

「俺が言えたものじゃないけど。笑えるんだったら、笑った方がいい。ここでそういう顔をしない方がいい」

「どつして」

「君が笑っているところを、俺は見たことがないから」

言つと賢治は、見本だというばかりに笑顔を作り、しかしその笑顔は、未佳から見ればひどく痛々しく、笑っているはずなのに激痛

をこらえているような、そういう表情に見えて仕方がないのだ。

「じゃあね」

賢治は手を振り、談話室の角を曲がった。

笑えない未佳は廊下にただ立ち、またどこから聞こえる音楽を、じつと受け止めていた。

エントランスのガラス扉に自分が映っていた。

肩まで届かない髪。

高校生のころの姉によく似ていた。

毎日、大学へ向かう列車に乗るようになった。

列車が高架を降りたあたりでいつも目につく木の枝が芽吹き、日に日に青さを増していく。毎日それを見ている。

函館で桜が咲いた。桜前線がようやく、本当にようやく、津軽海峡を越えた。

五月。

連休中はどこへも行かず、大学も休みで、だから緑里にも会わなかった。宏佳を見舞った日、緑里に会いたいと感じた。けれど、緑里の連絡先を未佳は知らなかった。それに、知っていたとして電話できただろうか。できなかつたと思う。

北区のはずれの駅を出る。高層マンションの間を駆け抜けていく風に、暖かさがあつた。冬が終わった。雪が溶けてしばらくたつのに、不意に思った。季節が変わったことに、もしかすると気付いていなかったのかもしれない。

大学までの道を、少しだけ歩幅を広げて歩く。常緑の街路樹と、こぎれいな家。作り物のような街。道がややカーブを切って、あと五分。道のりも覚えた。

教室にはもう暖房はなく、なのに暑かった。熱気だ。人が多かった。けれど知った顔がなかった。自然に緑里を探していた。

肩を叩かれた。

「よお、久しぶり」

振り向いた。緑里がいた。連休前に会ったときより、軽装だった。古着らしいジャージにジーンズ。ショートヘアはいつもどおりで、メガネも同じ。

「おはよう」

出した声がかすれた。数日ぶりに声を出したような気がした。気がした？ たぶん、本当に何日かぶりに声を出したのだ。

「風邪？」

実際、緑里にもわかるほどに声がかすれた。

「久しぶりに声出した」

「スイッチ、切りっぱなしか。どっか行ってたの？」

「連休？」

「そう」

緑里は教室の前列へ歩き出す。

「どこへも。広島さん、どっか行ってたの」

「どこへも。広島さんってのは、やっぱり居心地よくないな」

「気にしないで」

「気になるけど」

緑里はとうとう最前列まで歩いてきてしまった。壇のすぐ前に落ち着くと、テキストとノートを机に放るように広げた。

「こんなに前？」

「見えないの」

緑里は細い指で自分のメガネをつついた。

「中学生のころから、いつも席は最前列。未佳ちゃん、目はいいのかな」

「悪くないと思う」

「メガネなしで本、読めるのか」

「メガネかけたことない」

緑里は椅子に落ち着き、メガネを外した。メガネを外しても、その瞳は大きく、第一印象のとおり、ネコのようだった。

「かけてみてよ」

未佳に向かつて、自分のメガネをさしだした。

「未佳ちゃん、あんがい似合いそうだなあ」

受け取ったメガネは、ほんの少し重い。レンズが厚い。緑里が笑っている。メガネをかけた。

「おっ、IQが五十くらい上がった顔になった」

緑里が茶化すが、彼女のメガネを通すと、教室もネコのような緑里の顔も、なにもかもが歪んだ。焦点が合わない。ようするになにもまともに見えない。

「酔いそう」

十秒も目を開いていられない。メガネを外し、緑里に返す。

「これでも弱いんだよ。お金なくて、新しいメガネが買えないの」

「そんなに目が悪いの」

「悪い。メガネなしには、普通の生活できない。未佳ちゃんがうらやましいよ。てかね、メガネなしに物が見えるって世界が、私にはいまいちピンと来ないんだけど」

角度によっては、緑里のメガネは渦巻きが見える。分厚いレンズの向こうの大きな目は、でもなにもかもを見通すように澄んでいて、きれいだった。

「おんなじ物が見えてるのかな、なんて考えたことはあるけど」

カバンからペンケースを取り出して、小さくつぶやくように緑里が言う。

「どういうこと」

「未佳ちゃんが見てる景色が、おんなじものがわたしにも見えてるのかなって」

「見えてるでしょ」

「でも、それをどうやって証明する？」

「……」

「たとえばさ、トマトがありました。わたしはトマトが赤いって思ってる。熟したやつはね。で、未佳ちゃんもトマトは赤いって思ってるし、赤く見えてるわけだけど、わたしが見てるトマトの色が、

未佳ちゃんが見てるトマトの色と同じって、どうしてわかる？」

「赤いから」

「未佳ちゃんに見えてる赤と、わたしが見てる赤は、全然別な色かもしれないよ」

「……」

「哲学だよな。なのかな？　そういうこと。難しいよね。」  
「ごめん、変な話して」

「いや」

「そう考えるとき、意識してないだけで、どうも物事ってのは簡単なようで複雑でさ。そんなことを考えてたら、わたしの目が悪くなっちゃった」

「うん」

「ようやく、桜が咲いたね」

「うん」

「写真撮った？」

「なんとなく」

「なんとなくか。わたしは、札幌のさ、桜の名所がどこかもわからないから、まだね、全然まともに見てないんだ。案内してよ」

「わたしも、よく知らない」

「知らないの？　お花見、行かないの？」

メガネの向こうで、緑里の目がさらに大きくなる。

「行ったことない」

「それ、本当に言ってる？」

「本当」

「そっか」

「うん」

緑里は黒板に向き直る。ジャージの裾がほつれている。未佳はそんなところに気付いた。

「一緒に行こうか」

「どっへ」

「お花見」

「わたしと?」

「わたしと、未佳ちゃんと」

「桜見に?」

「そう。まだ満開じゃないから、もう、いまが盛りつてときに。連れて行ってね。約束。決定」

緑里が早口に言うと、見計らったように講師が壇に上がり、ざわめいていた教室が、波が引いていくような残響とともに、静かになった。

ふと見ると、緑里の後頭部に寝癖がついていた。茶色の髪が、毛並みに逆らって、はねていた。

ペダルペール……ゴミ箱のフタがペダルを踏んでも開かない。フタの上に燃えないゴミを詰め込んだレジ袋が置いてあるからだ。強く踏み込んだらフタは開く。けれどそうすると、レジ袋が転げ落ちる。緑里は転び出たヨーグルトの空パックを拾い上げて、袋に突っこんだ。燃えないゴミの日、木曜日だっけ。燃えないゴミの詰まったレジ袋を左手でつまんで持ち上げた。ペダルを軽く踏んだら、フタが開く。なんだ、これからは袋を持ち上げてペダルを踏めばいいんだ。簡単なことなのに、気付かなかった。

換気扇を回しながら、緑里は煙草に火を点けた。煙草を覚えたのは、高校を卒業するからしないかの冬。陸上部を勇退したのが三年の初夏。都大会にも進めず、インターハイなんて夢のまた夢。というか、夢にも見なかった。あの年のインターハイは、確か千葉だった。緑里の高校の体育会系の部活は、都大会へも進めず、全滅。大学受験の勉強をしながら、階下の居間から聞こえる甲子園の歓声が記憶に残る。東京の実家。

根本まで吸って、蛇口から水を出し、煙草の火を消す。そのまま吸い殻はペダルペールの中へ。部屋の中が煙草臭くならず、吸い殻の管理も簡単で……同じように大学へ進学し、一人暮らしを始めた



友人から教わった。あの子は、今どうしているだろう。わたしが北海道へ来たこと、言っていない。

換気扇を止めて、十四インチのテレビの前に座った。部屋は八畳。家賃は三万円。最初家賃を不動産屋で聞いたとき、とてつもないポロアを想像した。日も当たらない、緑里の倍は年を食ってるポロアパートを。けれど違った。きれいな部屋だった。東京でだったらきつと倍以上の家賃を取られる。春の雪が降る寒い日だったけれど、緑里はなんとなく、北海道に来たのが間違いでなかったと思った。折り脚のテーブルと、テレビと、中古のビデオデッキと、小さなカラーボックスと、パイプベッド。部屋にあるのはそれだけで、八畳が広く感じる。がらんとしている。まだ自分以外に誰も訪れたことのない部屋。母がどうしても北海道まで来たいと言ったが、羽田空港までも寄せ付けず、京急の大森町駅で別れた。

床にひっくり返る。静かだった。大森の実家は京急の線路に近く、快特が走るたび、家は揺れた。産業道路からは終夜トラックの走る音が止まず、とにかく賑やかな家だった。家を出てから一ヶ月もたっていないのに、もうずっと、何年も東京に帰っていないような気分になる。帰りたい？ 訊かれたら、帰りたくない、そう答えるかもしれない。なんのために北海道まで来たのか。東京から遠いからだ。埼玉でも神奈川でも駄目。名古屋や大阪でも駄目。仙台でも駄目。福岡なら……、進学先を考えているとき、ふと見えた北海道の文字。福岡ではなく札幌を選んだのはなぜだろう。新幹線でつながっていないから。品川から新幹線に乗ってしまえば、一本で辿り着いてしまう福岡より、京急で羽田まで出て、飛行機に乗らなければならぬ札幌が、より遠く感じた。飛行機に乗らなければ来られないなんて、なんて遠いんだろう。

受験のため、北海道へ向かう日のことを思い出す。羽田空港を離陸した日本航空のボーイング777。修学旅行以来の飛行機。人生二回目の飛行機。窓から見下ろす東京の街は、冬の終わりやたら空気が澄んでいた。湾岸の工場や、行き交う解やびつしりと建ち並

ぶ家や、新宿の高層ビル、初詣で迷子になりかけた明治神宮や東京タワー、レインボーブリッジが遠ざかる。飛行機は雲の中に入り、緑里はシートポケットの機内誌を読んだ。そのうち眠くなり、眠ってしまった。次に目覚めたとき、飛行機はもう着陸態勢に入っていた。窓から外をのぞいた。海が見えた。太平洋だと思った。やがて海岸線が近づき、陸地は真っ白だった。雪だ。新千歳空港に着陸した飛行機は、凍てついた誘導路をゆっくりと進んだ。あの日、北海道は晴れていた。

天井からぶら下がっている蛍光灯がまぶしい。床にひっくり返ったまま、目も開いたまま、まだ新しい記憶の糸をたぐる。予想外に簡単に感じた試験問題。札幌駅のそばの凍りついた横断歩道で転んだこと、帰りの飛行機で見た東京の夜景に涙が出そうになったこと、あわただしい部屋探し、一泊二日で札幌と東京を往復したこと、引っ越しの準備と、母の顔。

(どうして、北海道なの)

札幌の大学を受けたいと話したときの、母の顔。

(お金なら、生活費は自分で稼ぐから。奨学金も申し込んだから)

(どうして北海道なの)

めずらしく語気を強く、緑里の目をまっすぐに見て、緑里を立たせなかった母。そのとき、自分はなんて答えたんだろう。あまりよく覚えていない。

(遊びに来てよ。慣れたら。お母さん、北海道に行ったことないんじゃない)

自分も北海道に行ったことなどなかったのに。もう住んだつもりでいた。そして、なぜ自分が北海道に住もうと思ったのか。答えられなかったのだと思う。いまでもよくわからないからだ。

目を閉じた。静かだった。こうしていると、大森町駅を通過する快特の地響きがないのが、不思議だった。産業道路の騒音がないのも不思議だった。

自炊しようとして面倒になり、パンをかじって終わらせた夕食。

あまり空腹を感じない。昼食は学食だった。学食の全メニューを制覇してやろうと、今日はハンバーグを食べた。おいしくなかった。でも残さず食べた。一緒にテーブルに着いたのは未佳。あの子は食が細い。わたしの半分くらいしか食べない。背はわたしより頭半分以上高いのに。実家から通っていると未佳は言っていた。どこから通っているのかも聞いた。でも聞いた地名が札幌のどこなのか、はたして市内なのかもわからなかった。だから忘れた。

いまごろどうしているんだろう。床に仰向けで転がったまま、緑里は思う。高校時代の友人たちではなく、つい数時間前、学食でテーブルを挟み、記憶にも残らない会話をした新しい友人を、なぜ思うのだろう。

東京にいたのが、もう何年も前のような気がした。

未佳はベッドに転がっていた。いつもの体勢。窓の外は青く沈んでいて、すぐそばの街灯がちらちらしていた。夏になれば街路樹がせり出してきた、街灯の明りは部屋まで届かなくなる。冬と夏で、未佳の部屋の明るさは違う。

仰向けになり、写真を見ていた。自分が撮った写真。印画紙に焼き付けられた、宏佳の視点と、表情もなくレンズを向いている未佳の姿。

笑った方がいい。

賢治の言葉が耳に蘇る。

自作のアルバムから手を離す。半身を起こして、机の引き出しを開く。消しゴム、シャープペン、ボールペン、定規、なぜかコンパス、どこかの店の会員証、その奥。

くたびれた表紙の、薄っぺらいアルバム。カメラ屋がサービスでつけてくれるペラペラのアルバム。

ベッドに腰掛けたまま、開く。

セーラー服姿の自分。

笑顔だ。ピースサインを大げさにこちらへ向けている。今より数

段幼い顔立ちの自分。

幼い？

そう見える。

けれど、今の自分と大差ないような気もした。制服を着ていないだけ。笑顔を隠した分だけ、表情が乏しくなった分だけ、幼さが見えないだけかもしれない。高校の入学式の日、自宅の前で撮った写真だ。

隣にもう一人、ブレザーを着た宏佳がいる。控えめな笑顔で、真新しい制服がもう似合っている。宏佳がカメラを左手に持ち、それを掲げるようにして二人を撮った写真。だからフレームから未佳の右手がはずれている。でも未佳の左手はピースサイン。

二人で写っている写真はそれだけだ。あとは、未佳と宏佳が交互に写る。カメラを二人で交互に持って、お互いを撮ったからだ。この頃、未佳も宏佳も同じくらいの髪の毛の長さで、方にわずかに届かないくらい。だから、別々の制服を着ていなければ、同一人物に見えたかもしれない。未佳から見ても、宏佳は自分によく似ていると思う。けれど、宏佳はそれを否定した。同じ顔ではない。わたしはわたし、未佳は未佳、でしょ？

写真の中の二人は屈託のない笑顔だった。よく晴れている。朝、出かける前に撮ったのだ。覚えていて。父も母もいない。だからこんな顔をしているんだ。二十四枚の写真はすべて、未佳か宏佳かどちらかが必ず写っている。すました顔の宏佳、両手でピースサインの未佳、曲がったネクタイを直している宏佳、セーラー服の襟がめくれている未佳。はじけるような笑顔。

戻れないのだろうか。

そっとアルバムを閉じる。

ときどき見るのに、気付けばこのアルバムは、消しゴムや会員証の地層の底で、じつと開かれるのを待っている。なぜか奥に潜りたがる。だから表紙がよれてくる。けれど未佳はまた、机の引き出しを開いて、アルバムを文具の地層にしまい込む。空気に触れさせた

くない。劣化させたくない。もう取り戻せないかもしれないのに、この時間はこのまま、止めておきたい。

再びベッドに仰向けで転がる。

階下で電話が鳴っていた。三コール、四コール、五コール。誰も出ない。階下には母がいるはずだ。二時間ほど前、無言で二人は夕食を取ったのだ。ハコール目で電話が鳴り止んだ。母が出たのか、かけた側が切ったのか。

電話というものが苦手だ。とりわけ、携帯電話が嫌いだ。ところかまわず呼び出され、出なければ「なぜ出ない」と叱責される。だから携帯電話を携帯しない。父だったか母だったかに持たされた携帯電話は、ろくにいじりもせず、たいていは机の上、デスクライトの片隅でうつすら埃をかぶることになる。高校時代の友人たちはほとんどが携帯電話を持っていて、休憩時間といわず授業中でも指を忙しく動かして、メールを打つのに必死だった。未佳の携帯は、いつも自室の机の上に置き去りにされるから、学校では携帯電話を持たないめずらしい子だと思われていた。だから友人たちは未佳の携帯電話の番号を知らない。もちろんメールアドレスも知らない。そして未佳自身、自分の携帯電話の番号を覚えていない。メールアドレスなど覚えられない。大学に入学してからは、いや、宏佳が家からいなくなっただけからは、カバンの中に携帯電話を入れるようになった。姉から電話が来るかもしれない。それ以上に、姉になにかがあったら、きつとわたしに電話がかかってくる。だから、携帯電話を家停滞するようになった。けれど、未佳が最後にこの電話の着信音を聞いたのがいつなのか、もう思い出せないくらいになっていた。誰もかけてこないし、誰にもかけない。

だから、ベッドに仰向けになった未佳の耳に、慣れない携帯電話の着信音が届いたとき、ベッドの下から背中を打たれたような気分になった。

着信はメールだった。電話ではなかった。それでもめずらしいことには変わらない。自分のメールアドレスを何人が知っているだろ

う。だから、メールを誰が送ってきたのか、未佳はすぐに見当がついた。

緑里だった。

床の上に転がっていた。

引越したときに敷いた安っぽいスペースラグは値段相応に薄く、背中がすぐに床を感じてごろごろと痛い。小さなクッションを頭の下に入れて、点けっぱなしのテレビが耳障りだった。けれど、リモコンはテーブルの上で、腕を伸ばしても届かない。だから緑里はリモコンのかわりに携帯電話を右手に持った。

もしかすると、返信が来ないかもしれない。そんな気がした。

未佳にメールを打った。

(こんばんは。なにしてるの?)

電話した方が早いかもしれない。でも、電話をするほどのことじゃない。だから、返信が来なくてもかまわない。そして、北海道に来てメールアドレスを交換したのは、未佳が最初だった。メールを打つ相手が、いまの緑里には、未佳以外にいなかった。他愛もない。ただ指先が遊んだだけ。

蛍光灯がまぶしい。腕を額にかざして、明りをよける。窓の外は静かで、テレビの音だけが大きい。やはり、電車の音も車の音も路地を歩く人の声も足音も聞こえないのは、不思議な気分。

携帯電話が鳴った。

音に驚き、とっさに手から携帯電話が転がった。転がった先を探すように、緑里は身体をひねる。ひねるというより、床の上を転がった。肘が痛い。腰も痛い。足の先に何か触った。ディスプレイが光っている。

Eメール受信 1件。

未佳だった。

(何もしてない)

たった一行。

それでも、未佳から返信が来たことに、緑里は素直に驚き、嬉しくなった。

(花見に行こう)

打った。

また、無言。

テレビの音。

隣の部屋で聞こえたと音がする。

けれど静かな夜。

遠くで車のクラクションが鳴った。ずっと遠く。

緑里は起き上がる。妙な姿勢でいたからか、背中が痛かった。

着信音。

(今から?)

返信。

(満開になったら)

テーブルに手を伸ばす。なんのことはない、リモコンはすぐそばにあった。

着信音。

(いいよ。)

テレビを消す。とたんに、部屋が無音になる。

ベッドに背中をあずけて、両足を開いた。身体が固まっている。

陸上部が泣く。こんなに身体が硬くなってる。ちょっと、走ろうかな。

着信音。

音が違う。電話だ。

「もしもし」

「積森です」

「未佳ちゃん」

「こんばんは」

「なに、そんなあらたまって。こんばんは」

「暇なの?」

「暇だった。未佳ちゃんは、何してたの？」

「何も」

「そっか」

「広島さん、何してたの」

「なにも」

「なんだ」

「花見、行こうよ」

「うん」

「桜の写真、撮ろう」

「……」

「案内してよ」

「……広島さん、何かあったの」

「変？」

「変」

未佳の問いに、言葉を探した。

「別に、何も。なにもないよ」

緑里は、ふたたびスペーススラグの上に、横になる。

電話をかけるつもりはなかった。ただ、メールを打つのが面倒になった。それだけのこと。話した方が早い。そう思った。

「なんかあったの」

電話の向こうの緑里は、学校で言葉を交わすときの声色と、違って聞こえた。

「なんにもないよ」

声に勢いがなかった。

「暇だっただけ。未佳ちゃん、ごめん」

「謝らなくてもいいんだけど」

「ならいいんだ」

ほんのわずかな沈黙があった。

居心地が悪かった。



知り合って間もない。だから未佳は緑里のすべてを知らない。すべて？

相手のすべてが分かる？

未佳は宏佳のことを想う。結局、わたしはお姉ちゃんのことも分からなかった。

だからなのか、相手の声音が気になる。そんな、知り合って間もない緑里がどうなろうと、わたしには関係ないはずなのに。

「広島さん」

「ん、なに」

「行こう」

「どこへ」

「桜。桜見に」

「……」

「咲いたら、行こう」

「ありがとう」

緑里の声がくぐもって聞こえた。

泣いているわけじゃないよね。未佳はふと胸の奥が冷たくなった。

「桜、咲いたら、連れて行って。案内して」

緑里の声が耳に届く。泣いているわけではなさそうだ。

「広島さん」

「なに？」

「なんでもない」

「ごめん。変な電話で」

「かけたのはわたしの方だから」

「そうだった。……また、学校で」

「わかった」

電話を切ると、未佳は携帯電話をコートのポケットに入れた。

緑里は、いま自分がどこにいるのか、訊ねなかった。

緑里は、おそらく彼女の自室にいたのだろう。風の音も、誰かの話し声も、車の音も聞こえなかった。ときどき、テレビの音が聞こ

えた。

未佳は冷え切った耳に手を当てた。

水銀灯がちらちら点っている。

街の息づかいが聞こえる。

未佳は街を見下ろす、あの公園にいた。

ベンチにも座らず、ただ札幌の街並みを眺めていた。JRタワー

も、高層マンションも、テレビ塔も、ここから見ると意外なほどに

近い。そして、札幌の夜の空は、明るい。

夜は、まだ冷えた。

桜。

桜が満開になるには、まだ少し早い。だから、木々はまだ芽吹いてもいない。ふと気を巡らすと、冬の匂いがまだ残っていることも気付く。

いつから、冬が嫌いになったのだろう。

未佳は、ポケットの中で手を握る。

指先が冷えていた。携帯電話を持っていた左手の指先だ。

寂しいと想った。世界でたった一人残されたような気がした。緑里からの電話が、別の遠い世界からの着信であるような、そんな気がした。目の前に広がる街並みには、数え切れないほどの人々が住んでいて、いまも生きているはずなのに。

古川賢治の言葉が、……世界が今にも終わるのではないか、そういう恐怖感が、いまの未佳にはわすかでも分かるように思えた。

緑里の声が、まだ耳に残っていた。

寂しかったのかもしれない。

なぜか、そう思った。

きつとそつだ。

## ライラック

### 四、ライラック

緑里と約束をした花見には行けなかった。桜がいよいよ満開になったころ、緑里が高熱を出して寝込んでしまったからだ。

(朝ね、起き上がれなかった)

週が開けても大学に現れない緑里に、未佳は水曜日になってから初めて電話をした。四回、五回とコールして、ようやく緑里が出た。地の底を這っているような、ひどい声だった。未佳が夜景を眺め、緑里と電話で話をした週末、緑里は突然体調を崩して寝込んでいたのだった。

(こんなひどい風邪、引いたことないのに)

電話の向こうで緑里が荒い息をしていた。未佳は大学のエントランスで、反響する自分の声を受話器に当てていない右の耳から聞いていた。エントランスには未佳のほかには誰もいなかった。窓の向こうで、桜が満開になっていた。

緑里は、大学にほど近い、小さな学生街の片隅に建つアパートに住んでいた。受話器からも熱を帯びた吐息を感じそうなほどの緑里の声を聞いて、未佳は彼女の部屋を訪れようと思った。

(ねえ、広島さんの部屋、どこなの?)

風はもう暖かかった。春秋もののコートを着ていたけれど、緑里に聞いた住所まで歩くうち、コートが邪魔に感じた。

(うち、分かるかな。学校の前の道、セイコーマートの角を曲がって、一つ目の角を左に曲がって、いち、にい、三軒目。わかるかな) 緑里の息づかいが荒かった。

(わかんなかったら、また、電話するよ。なにか欲しい?)

おそらく緑里は布団にくるまっているのだらう。電話の向こうで、

熱い息に混じり、ごそごそと音がした。

(牛乳)

空は薄く曇っていた。雲を透かした太陽は暖かい。子どもたちが自転車で未佳を追い抜いていく。寒さや雪も気にせず、自転車に乗れるいまごろの季節が嬉しかった。思い出していた。足もとで踏みしめる、冬の間にとまった砂埃を踏みしめ、冷たさも痛さも感じない風を受けて、春の訪れを全身で感じていたころを。季節をあまり意識しなくなったのは、いつからだろう。テレビの天気予報で、雪だるまのマークが雨傘のマークに変わったのを見て、誰にも言わずにうれしくなっていた小さいころの自分。ぼんやり思いながら、歩いた。

未佳はセイコーマートに寄って、牛乳と、少し考えてシユークリームを二個買った。店員のおばちゃんはやたらと滑舌がよく、未佳は気圧されるようにして店を出た。店を出て、一つ目の角を左に曲がって、いち、にい、三軒目。

(テルトル・ルージュって名前だから)

緑里に教えてもらったアパートは、簡単に見つかった。アパートの横に小さな花壇があり、チューリップの芽が出ていた。

(一〇一号室ね。一番奥の角)

一番奥の角。きれいなアパートだった。新しい、というよりは、きれい。一〇一号室に、小さな手書きで「ひろしま」と表札が出ていた。呼び鈴を押した。ややあって、扉の向こうに人の気配があった。

「積森です」

鍵が開いた。扉がゆっくり開いた。むっとするような熱気が、すつと流れた。

「やあ」

メガネをかけ、化粧気もなく、ぼさぼさの髪をした緑里がいた。上下、学校で見るような古着風のジャージではなく、恐ろしく野暮ったいジャージを着ていた。

「早く、入って。誰かにこんなかつこう、見られたら大変だ」

緑里は笑ったが、声にまったく張りが無い。顔にうつすらと赤みが差している。

「おじゃまします」

緑里にうながされ、部屋に入った。

「無理してこなくてもよかつたのに。風邪、うつっても知らないよ」  
緑里の足取りがおぼつかない。よろけながらティッシュペーパーをつまみ、長く鼻をかんだ。

「ひどいかつこうでしょ。寒くて寒くて」

緑里が着ているのは、どうやら高校時代のジャージのようで、左胸に名札が縫いつけられたままだった。

「三年一組だったの」

未佳は小さなテーブルの前に座り、緑里はベッドの腰を下ろした。

「ああ、これね。見られちゃったか」

胸の名札をつまんで、緑里は苦笑した。

「楽なんだよね。パジャマ代わり」

「牛乳」

「ありがとう。これは？」

「シュークリーム」

「ありがとう。シュークリーム、好きだよ」

「コンビニのだけど」

「上等なやつは、一緒に買いに行こう。今日はこれで十分だよ。ありがとう」

「飲む？」

「うん」

「コップ、どこ？」

「ごめん。ありがとう。シンクの横。探さなくても分かるよ」

立ち上がり、たった数歩で届いてしまう小さなキッチンから、未佳はコップを一個、取る。

「未佳ちゃんは」

「いいよ」

「いくらだった？」

「お見舞い」

「ありがとう」

緑里の言葉に、未佳は少し笑った。

「なに」

「広島さんの『ありがとう』って、なんか不思議だ」

「わたし、お礼も言わないような人種に見える？」

パックを開いて、牛乳をコップに注ぐ。緑里は手つきもおぼつかない。

「いや、そういうことじゃないよ」

「感謝の気持ち。一人暮らして、こういうことなのね」

緑里はコップから、一気に半分ほど飲んだ。

「風邪を引いても一人。布団の中でうなつてなきやなんない。でも、未佳ちゃんが来てくれて、嬉しかったりって」

「嬉しい？」

「嬉しいよ。助かった。一人で暮らしてみないと、こういうことはわかんなかった。そういう意味でも、ありがとう」

一息でしゃべって、緑里は大きく息をついた。

「熱、あるんでしょ」

「体温計、ないの」

「病院、行ってないの」

「立てるようになったのは、未佳ちゃんの電話からだよ」

「ずっと、寝てたの？」

「起き上がるうと思わなかったから」

「熱っぽい顔してる」

「寒い」

「ごめん」

「なんで」

「玄関、開けたから」

「損な性格だね」

言つて、緑里は残りの牛乳も飲み干した。ベッドから下りて、テーブルを挟んで未佳と向かい合つて座る。

「いただきます」

シユークリームの袋を開け、緑里がかじつた。

「おいしい。しみるわ」

「ご飯、は訊くまでもないのかな」

「日曜日から、ダイエット中、だね」

「言つてくれれば」

「ご飯、作りに来てくれた？ 泣かせるなあ」

緑里は瞬く間にシユークリームを食べてしまった。未佳はもう一個も緑里の手許に押した。

「これ、未佳ちゃんの分じゃない？」

「広島さんの分」

「泣かせるなあ」

「食べられるんなら、もう、安心かな」

「そうかもね」

「食べたたら、寝て」

「お客様の前で？」

「お見舞いだから」

緑里は二個目も三口で食べてしまった。三個にすればよかったかな。

「お花見、行けなかったね」

未佳の言つとおり、緑里はシユークリームを食べて、もう一杯牛乳を飲むと、布団に入った。布団に入り、細くつぶやいた。

「ごめんね」

メガネをはずした緑里は、幼く見えた。

「まだ咲いてる」

「テレビで見たよ。いまが満開なんだつてね」

「うん」

「行きたかったなあ」

「仕方ないよ」

「うん」

「牛乳、冷蔵庫でいいよね」

「あ、ごめん」

緑里の部屋は、飾り気がなかった。なんとなく、未佳の部屋に似ている気がした。余計なものが何も無い。小さなカラーボックスの上に、大きなハンカチでカバーしてカメラとレンズが置いてあった。カラーボックスには、文庫本とマンガの単行本とCD。女の子の部屋というより、男の子の部屋のようなだった。けれど、掃除は行き届いているのか、散らかっていないし埃も浮いていない。緑里の性格が見えた。

「なんか面白いものあった？」

「ううん」

「殺風景でしょ」

「きれいだよ」

「もうちょっとねえ、女の子らしい部屋ならいいんだろうけどねえ」

「眠そう」

「んん、シュークリーム効果かなあ」

「寝てもいいよ」

「相手できなくて悪いね」

「お見舞いだから」

「こつち来てすぐじゃなくて、いまごろ風邪を引くなんて」

未佳はまた、さっきまで座っていたテーブルの前に戻る。レースのカーテン越しに、午後の陽射しがあった。暖かい。この部屋は南向きに窓がある。

「ストーブ、つけようか？」

「布団の中は、快適。大丈夫」

未佳はそっとベッドの横に移った。そして、そっと緑里の額に左手のひらを当てた。じわりと、体温が伝わった。



「熱、あるね」

「優しいんだね」

「誰？」

「未佳ちゃん以外に、誰かいる？」

緑里は目を閉じていた。まつげが長い。きれいな顔をしていると未佳は思った。

「気のせいだよ」

手のひらを当てたまま、未佳。

「うつつたら、あきらめて」

「そのときは」

「なに？」

わたしにお見舞いに来てよ。

未佳は言おうと思ったが、言葉は唇から出ようとしなかった。緑里の額に当てていた手のひらを引っ込めた。

緑里を、未佳は自宅に呼べないと思った。呼びたくない。

「何でもないよ。寝たら」

「うん。まいったなあ。めったに風邪なんか引いたことないのに」

「疲れてたんでしょ」

「そうなのかなあ」

「じゃあ、顔見たし、帰ろうかな」

「ゆっくりして行って、って言いたいけど、話し相手もできなくてごめん」

「こちらこそ。つらいのに、ごめん」

「シュークリーム、おいしかった。ありがとう」

未佳は立ち上がる。緑里が布団を襟元まで引き上げながら、大きな目を未佳に向けていた。

「鍵、どこ？ 鍵かけて、郵便受けに落しておくよ」

「カメラの横」

「わかった」

「本当にありがとう」

「次からは、ちゃんと、病院行きなよ」

「次からね」

「じゃあ、また」

「うん」

「明日も来るよ」

緑を振り向いて言うと、大きな目はまだ未佳を向いていた。熱のせいか、潤んでいた。やはりきれいな目だと未佳は思った。

「ノート、よろしく」

「わかった。じゃあ、お大事に」

「ありがとう」

部屋の鍵を借り、未佳は部屋を出る。できるだけ、扉を薄く開いた。熱っぽい空気が、また流れた。これは、緑里の体温だ。

鍵を閉めた。郵便受けから、鍵を投じた。

外は、来るときとかわらさずの薄曇り。

けれど、未佳にとっては、暖かかった。隣家に桜の木が立っていた。部屋に入るときは気づかなかった。桜は満開だった。

緑里は気づいているのだろうか。すぐそばで、桜の花が満開になっていること。

明日、緑里に教えようと、未佳は思った。メールではなく、明日ここに来たとき、彼女に直接、教えようと思った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0041h/>

---

北極星

2010年10月9日23時04分発行